第8回 少年矯正を考える有識者会議

日 時 平成22年7月15日（木）午後1時30分～午後5時00分

場 所 東京高等検察庁 17階第2会議室

午後1時30分 開会

○事務局 それでは、時間となりましたので、ただいまから会議を開催させていただきたいと思いを思います。

岩井座長、よろしくお願ひいたします。

○岩井座長 それでは、第8回少年矯正を考える有識者会議を開催いたします。

議論に入る前に矯正局から連絡があるということですので、よろしくお願ひします。

○少年矯正課長 少年矯正課長でございます。

第5回会議の冒頭に申し上げましたように、今年の少年院長会同と少年鑑別所長会同が終了しましたので、その内容について簡単に御報告させていただきます。

お手元に、それぞれ少年院長会同と少年鑑別所長会同における意見の概要というペーパーを用意いたしましたので、基本的にはそのペーパーをごらんになっていただき、そこから抽出する形で簡潔に申し上げたいと思ひます。

まず、少年院長会同におきましては、少年院に係る基本的制度の在り方を検討する上で考慮すべき事項というテーマを中心に協議がなされました。

まず、矯正教育の目的として今後何を重視すべきかにつきましては、例えば矯正教育の目的とは少年の健全育成である。その構成要素として再犯、再非行防止という側面と社会適応という側面があるといった意見、あるいは社会で少年が自立できるようにすることを主眼とすべきという意見などがありました。

また、矯正教育の内容及び方法につきましては、例えば生活指導、職業補導等の指導領域を再編成すべきだといった意見、職業補導をもっと社会生活に有用なものとして見直すべきという意見、処遇課程、すなわち処遇コースですね、これを見直すべきという意見。あるいは集団生活になじみにくい少年を対象とする処遇システムを構築すべきという意見などがあったところでございます。

次に、少年鑑別所長会同におきましては、これも同様に、少年鑑別所に係る基本的制度の設計上考慮すべき事項というテーマを中心に協議がなされました。

まず、鑑別の種類と手続という面につきましては、例えば家庭裁判所の請求による鑑別と、児童福祉機関を含む関係機関からの依頼、又は、少年鑑別所の自発的な必要による鑑別とに大別してはどうかという意見、あるいは少年の非行や問題行動を対象とし、より縦貫的・継続的に関与する方向で、鑑別に係る制度設計を実施すべきというような意見等がありました。

また、鑑別に係る専門的知識・技術の供与についてということにつきましては、例えば、地

域の非行防止センターとしての役割を法律化すべしという意見、あるいは一般少年鑑別や刑事施設に対する処遇共助、地域社会等からの依頼による非行に関する知見の提供などを新しい業務として整理し、法律で規定すべきという意見等がありました。

このほか、両会同におきましては、不服申立制度の在り方、第三者機関の設置の在り方、職員の職務執行力の向上を図る上で考慮すべき事項等についても協議がされております。

最後に、若干付け加えさせていただきます。この有識者会議もいわば後半戦を迎えたところでございます。事務局といたしましては、これまでの各委員の皆様方からの御意見を集約して、なるべく早い時点で御提示をさせていただき、有識者会議としての意見の方向性を確認する機会を設けさせていただければと考えておりますので、よろしく願いいたします。以上でございます。

○岩井座長 どうもありがとうございました。

それでは、本日の議題に入る前に、今後の会議の計画について皆さんにお諮りしたいと思います。

当初は、全13回で終了する見込みでございましたが、皆さんに熱心に御討議いただいたということもありまして、当初の予定では議論を尽くせないことが見込まれまして、あと2回、回数を追加することを提案させていただきたいと思っております。また、広島少年院の視察を入れてほしいという委員の御意見や、少年矯正を考える上で被害者の視点、関係機関の御意見も重要だと考えましてヒアリングを計画してみました。御意見がありましたら、よろしく願いいたします。

何か御意見ございますでしょうか。

○影山委員 もし可能であればということなのですが、関係機関ヒアリングの中に児童相談所とか、児童自立支援施設等が関係する福祉畑の御意見も少し伺いたいということで、厚生労働省関係でどちらか適切な方がいればこれも加えていただけるといいかなという気がいたしました。御意見申し上げます。

○岩井座長 それでは、また事務局で御検討いただければというふうに思います。

それでは、ほかにはよろしいでしょうか。

それでは、本日の議題の少年矯正の特質を踏まえた施設運営の透明性確保の在り方等についての議論を行いたいと思っております。

本日の議論を展開するに当たり、小田原少年院の門脇院長、静岡少年鑑別所の小板所長に御同席いただいております。お二人には、必要に応じて現場の立場からご説明をいただきたいと

考えておりますので、よろしく申し上げます。

なお、本日の議題について検討するに当たり、時間に限りもございますので、私のほうで論点を3つに絞らせていただきたいと思います。まず、1つ目は少年矯正の特質を踏まえた施設運営の透明性確保の在り方について。少年院及び少年鑑別所に第三者機関は必要か、また、設置する場合はどうあるべきかといった観点から御検討いただきたいと思います。

2つ目としましては、不服申立制度について少年院及び少年鑑別所に不服申立制度を創設する場合、要請されるものは何かといった観点から検討したいと思います。

最後に3つ目として、職員と在院（所）者の関係の在り方等について第三者機関や新たな不服申立制度の運用を前提とした場合、どういう点について配慮する必要があるのかといった観点から検討したいと思います。

それでは、まず、1つ目の論点の少年矯正の特質を踏まえた施設運営の透明性確保の在り方についてです。施設運営の透明性の確保、施設の自浄作用の確保、被收容少年に対する処遇の向上を担保するための制度として、刑事施設における視察委員会のような制度の創設について検討する必要があると考えられます。現在、少年院及び少年鑑別所には、第三者機関は設置されておりませんが、第三者機関について御意見をいただければと考えております。

初めに、少年院及び少年鑑別所には第三者機関が必要かどうかという点について、各委員のお考えをお伺いしたいと思います。

それでは、どなたか先に御意見ございますでしょうか。皆さんから御意見をいただいてよろしいですか。最初、石附委員から申し上げます。

○石附委員 私はもちろん、必要なことであると思うんですけども、その機能にはある意味では限界があるだろうと思います。先に、刑事施設の方でできておりますけれども、その第三者委員会というのが発達途上の少年に関する少年法の趣旨から申しますと、非常に難しい問題が出てくるので、誰でも第三者委員だったらいいいというわけにはなかなかいかないことが出てくるのではないかと思います。

ですから、その辺は十分御理解いただくことが必要なのと、第三者委員会という位置と立場がどうなるのかというのが、何か本当に一部の方だと思いますけれどもすごく心配していらっしゃる方がありますので、第三者委員会というのはいいい面も掘り起こしながら健全な方向を模索するための委員会でなければならないというふうに考えております。以上です。

○岩井座長 それでは、市川委員、よろしいでしょうか。

○市川委員 ちょっと私はまた違う見方をするかもしれません。私自身、精神科病院の管理者、

知的障害者施設を経営している福祉法人の理事長をしまして、医療と福祉の観点からお話しさせていただきます。私は第三者機関を作るのは当たり前の世界だというか、世の中だと思います。

確かに、第三者機関を作ったらすべてうまくいくわけではありません。精神科では、第三者委員会に当たるものが精神保健福祉法に基づく立入検査です。病院と関係なく、申立てがあった場合はすぐに立ち入り検査があります。結果として「すぐ退院させなさい」という命令が出ることもあります。

福祉はオンブズマン制度が導入されています。私が関係する福祉施設の場合、3人のオンブズマンがおり、1人が弁護士、1人が学識経験者、1人が当事者です。そこで論議していただき、どういう結果が出るかについてはすべてお任せしています。

こういう制度を作りますと、「職員が委縮する」とか、「自分たちを非難するんじゃないか」とか、「揚げ足をとるんじゃないか」と不安を持たれる方があります。しかし、一生懸命働いている職員はそんなことはないわけです。

医療や福祉にいて感じるのは、第三者委員会を作ることが重要ではなくて、事実関係の把握ができるか否かが重要です。事実関係がもし、きちっと把握できていれば、もうそれで70%から80%は対応が決まります。

立派な第三者委員会を作って立派な肩書の方を連れてきても、事実関係の把握ができていないと結局そこから出てくる結論はあいまいなものになってしまいます。

病院管理者として、福祉施設の理事長として、カメラを多数設置しました。大反対が起き、職員たちから「おれたちのことを疑っているのか。」と言われました。

医療機関の中でいいますと、例えば、意識不明になった患者さんがいたときに、保護者の方から「職員が何かしたのではないか。」という話が出てきます。観察カメラには録画装置を付けてあり、1か月分ぐらいは簡単に録画できるようになっています。訴えがあったときに逆回転させて事実関係を確認するということができます。調べてみたら、ご自分がコンクリートの壁に頭を打ちつけたということが分かり、コンクリートの壁に薄いラバーを張ることで対応がとれました。

福祉施設の場合ですと、けがをしたということで職員が突き落したんじゃないかという話が出ました。逆回転させてみたところ、ベッドから落ちてけがをした事実がわかりました。

逆もちろんあります。あまり言葉のない人が訴えてきたときに、逆回転してみたら、確かに職員が問題な行動を起こしているという事実がつかめた場合もあります。否定していた本人

に事実を示せば、次の対応がとれます。

個人のプライバシーだとか個人情報も大切ですが、やっぱり重要なことは事実をつかむということだと思います。事実が判明して自分たちが間違っていたら、当然謝らなきゃいけないし、処分しなきゃいけないことだし、正しかったら正しいと主張しなきゃいけないと思います。

事実関係が分からないままですと、結局うやむやであいまいなままになってしまいます。そうすると、また似たことが起きてしまいます。批判はありましたが、今は病院の職員からも福祉施設の職員からも、カメラをつけたことで自分たちが守ってもらえるということで感謝されています。

重要なことは第三者委員会を作ることではなくて、事実を把握できる方法を考えることだと思います。これがなしにいろいろ議論をしても、傷口をさすっている状況であって、次の解決策がとれません。そうしますと、似たことが起きるといふ悪循環が生じると感じています。以上です。

○岩井座長 どうもありがとうございました。

それでは、影山委員、よろしくお願いします。

○影山委員 私は地元で福祉施設、例えば児童養護施設とか乳児院とかそういうふうな福祉施設と、あと児童相談所の一時保護所とか、そういうふうな場所における第三者委員をやっております。そういう経験からしても、やはり少年院、あるいは少年鑑別所においても各施設ごとに第三者委員会は当然必要であろうというふうに考えています。

ただ、既に各先生方も指摘されているように、第三者視察委員会を作ればそれで透明性はしっかり確保できるとか、いろんな問題が解決するというのではなくて、それ以外のさまざまな透明性確保の努力というのをしていくこととあわせて、視察委員会を活用していくということが必要なんだろうなというふうに思っています。

また、視察委員会の委員の方々は、やはり各施設の歴史であるとか、そこでやっている矯正教育の趣旨、内容、目的等に関してしっかりと理解をされた方ができるだけ頻繁に施設のほうに赴いて、その施設の状況をしっかりと把握していくということが大事なのかなというふうに思っています。

特に、少年院とか少年鑑別所の収容されている少年の特徴からして、視察委員の方に積極的に何かこう訴えていくことができる子ばかりではない。そういうふうな声を上げられない子どもたちの表情とか声とか要望とか不満とか、そういったものを視察委員の方々が吸い上げられるようなシステム、それはおそらく希望するお子さんに関しては面接をすべきですが、希望し

ていなくてもアトランダムにお子さんを抽出して、会議を行うときの余った時間などに積極的に面接をして、雑談でもいいから話をしてくるとか、そういうふうなことができるような視察委員会であつたらいいのかなというふうに思っています。

それから、視察委員会というのは、何かこう少年院とか少年鑑別所を監視するような、あるいは職員と敵対するような、そういう組織ではなくて、むしろ、職員のさまざまな困り感とか苦勞されている点もしっかり理解をした、場合によってはその施設に対してそれなりの応援団になるような、そういうふうな組織であつてもいいのかなと、そんなふうに思っております。以上です。

○岩井座長 どうもありがとうございました。

それでは、川崎委員、よろしくをお願いします。

○川崎委員 皆様の今までのお話とほとんど重複するのですが、今の時代、そして、福祉施設でも多くの所でそういうものが設けられているということを考えますと、何らかのそういう機関を設けるべき時代になっているのではないかなと思いますし、そのことが少年矯正をより世の中に理解していただきながら、よりよいものにしていく転機になつたらいいと思います。

ただ、少年施設は非常に規模が小さくて、例えば少年鑑別所の多くは所長以下15名というようなところですので、そういう委員会を設けることが本来業務に支障が出てきたりとか、ただでさえ人手不足が言われる中で、さらに多忙になつたりするおそれもあるので、そういう配慮も、委員会の規模ですとか頻度ですとか、考えないといけないかなと思います。

それから、委員の選定について、やはり少年矯正に、あるいは子どもの教育、健全育成に理解のあるというか見識の高い委員を選定していくことが必要だろうと思います。それから、少年院法が非常にアバウトな法律で、矯正教育についてもどうすべきということが細かく決まっていないので、まずそれをきちっと決めていかないことには、どのような意見もありというようなことになってしまつて、対応に混乱するようなことにもなりかねないかなと思っております。以上です。

○岩井座長 どうもありがとうございました。

それでは、徳地委員、よろしいでしょうか。

○徳地委員 後から詳しく時間をいただきまして、国立武蔵野学院の受け入れ方法について説明いたします。

私は平成13年から17年まで施設長をやっていたんですけども、実はこの苦情解決システムというものを導入したわけでありまして。この根底にありますのは、児童福祉法の改正があ

ったり、それから、児童虐待防止法が導入されたり、社会福祉事業法が社会福祉法になったり、あとは児童福祉法の最低基準等が改正されたりということで、非常に大幅な法律改正がありました。

私自身も37年間、施設長をやる前に児童自立支援施設一筋だったもので、こんなに現場を変えてしまっているものかどうかという、非常に現場におりまして大変危惧したわけでありましてけれども、実際、私自身がこの制度を導入しまして今考えてみますと、この苦情解決システム（第三者機関）はもっと早く導入する必要性があったと考えております。

もう一つ、今までは学校教育導入にしましても準ずる教育ということで、施設がすべてやはり子どもの能力に応じた学校教育をやったわけなんですけれども、これに関しましても児童福祉法が改正されまして施設長に就学を課す義務があるということで、学校教育を導入しなければならなくなりまして、私自身も、先ほど言いましたとおり、子どものニーズに合った教官が教える授業で何でいけないのかという、考えがありました。私は学校を導入する準備段階はしましたが、私が退職した後、国立の女子の児童自立支援施設と男子の児童自立支援施設の2か所に学校教育が実施されましたが、私はその準備段階で退職してしまいました。

実際、この第三者委員、もしくは子ども権利委員会とかいろいろ呼称はあるんですが、この制度を導入してみまして児童の権利に配慮したサービス提供が図られるだけではなしに、児童に対する処遇の向上とか、それからまた、当然これ児童に対する福祉サービスの提供の質の向上とかがありますとともに、やっぱり職員自身が処遇の在り方を見直し、もしくは改善させる必要性がこれにあるわけです。

今になって考えますと、この制度はもっと早急に導入すべきであると考えております。以上です。

○岩井座長 どうもありがとうございました。

それでは、廣瀬委員、よろしくお願いします。

○廣瀬委員 これまでのお話にもほとんど異論はございません。第三者機関は設けるべきだと思います。それも実効性のあるものでなければならぬ。そうすると、少年矯正の実情について理解がある、専門性のある人、教育、福祉、児童の問題など、そういう面ですね。それから、少年院、少年鑑別所ともに地域社会とのつながりが重要だと思うので、その地域社会の代表のような人も必ず入っていただいたほうがいいのではないかと思います。また、おそらく法律家、権利保護の関係の方が入るだろうと思います。そうすると、おそらく4、5名程度はそれぞれ設けて、いろいろな立場の方にちゃんと入っていただくということになる方が望ましい。

あまり2人など人数が少ないと、特に個性の強い方が入ってくるといろいろ問題が起きるとい
うこともあると思いますから、幅広く意見を聞くという意味と、そういう地域との連携、専門
性、全体のバランスをとるといようなことも考えると、そういうことが必要なのではないか。

ただ、そうなってくると、対応する職員に非常に負担が増えるんじゃないかと思えますね。
その辺は、この問題に限らないんですが、今までの非常に余裕のある体制でやっているのなら
いいわけですが、非常に人が足りないという問題はすでに出てきていますから、この関
係も含めて是非、対応できるだけの増員、人の手当てを、是非セットで考えていただかないと
いけないだろうと思います。

○岩井座長 どうもありがとうございました。

では、毛利委員、よろしくお願いします。

○毛利委員 皆さんがおっしゃったことで異論はないんですが、私もう5、6年、少年院に出
入りしてまして、第三者委員会が入ると苦しいだろうなという思いを感じてしまっています。
それを感じて、今、初めて自分がミイラ取りがミイラになっているということが分かりました。
数年前から少年院の篤志面接委員の活動を続けているわけですが、そういう経験のなかで、法
務教官の仕事の難しさや複雑さがある程度わかるようになって、法務教官に同情的になって
いるということです。

その第三者委員会を作って、委員会がやってくるのを各少年院が対応してお世話するという
のは、今の現状では、人的な配置の問題ですごく大変だと思うので、これは矯正局が管区単位
で一生懸命その方たちの人選なり少年院に入るに当たっての予備知識をみんなで共有する、そ
ういう仕組みを各少年院の1人の法務教官におっかぶせないで、ある程度大きなところで、そ
ういう事務作業を専任でできるところがきちんとやった後に、少年院に渡すというのがいいよ
うに思います。

また、委員の方が少年院のことを理解するようにしてほしいなと思うんですが、それでコミ
ュニケーションを図ってほしいんですけども、あまりコミュニケーションを図って少年院の
立場だけがわかる人たちになっても困るわけですね。やっぱり厳しい視点を持っているよう
な人も入れなきゃいけない。この割合をどうするのかというのを、かなり仕組みとして真剣に考
えなきゃいけないんじゃないかなと思います。以上です。

○岩井座長 どうもありがとうございました。

では、広田委員、どうぞ。

○広田座長代理 私も皆さんと大体同じような意見で、第三者機関をやっぱり作らないといけ

ない時期だと思うし、作るとそれなりに有効な部分はあると思うんですが、これも皆さんが言われたように、やっぱり委員会が負担になるとかという部分があるし、委員会が暴走するという、少年院の職員の暴走も困るけれども、この第三者機関の委員が暴走すると、きっと各施設はおろおろしてしまうんじゃないかと思うので、その話を多分皆さんいろいろ言われたんだと思うんで、かなりそこをきちんと制度設計のところで考えていかないといけないんじゃないかなと思いますね。

○岩井座長 皆様、かなり組織の在り方とか、第三者機関設置については賛成だという、導入すべきであるというふうな御意見だったと思うのですが、そしてまた、どういう組織であるといったとか、その機能をどうするかとか、名称についてもいろいろお考えがあると思うんですが。

○市川委員 今、いろいろな委員から「ユニークな人が入ってくると大変だ。」とか、「あまり少年院のことが分かっていない人が入ってくると大変だ。」という発言がありました。僕は逆で、なるべく少年院のことを分かっていない方に少年院を分かってもらうという発想があったほうがいいと思います。私の知っている限り、ユニークな方で厳しいことを言っている人は第三者委員になっていただくと中の論理が分かってきて、理解していただけることもあります。広田委員がおっしゃったように、第三者委員が暴走して福祉施設の運営が行き詰ってしまったという話は聞いたことがないです。

何のために第三者委員会を作るかという、外部の目でいろいろ見ていただいて、少年院を理解していただくというのが重要だと思います。あまり人選を気にせず、もっと広く選んだほうがいいと私は思います。

○岩井座長 私から門脇院長と小坂所長に質問したいのですが、いろいろな第三者機関の案が出ておりますが、現場への影響として具体的にどのようなことが考えられますでしょうか。何かちょっと懸念などありましたらお話しいただきたいと。

○門脇院長 現場への影響ということですか。まず初めに、第三者機関を設置する必要性の問題ですが、今、各委員の方からありましたが、私も個人的には先ほど市川委員おっしゃいましたけれども、きちっと自信を持ってやっていたらどうという話でもないと思います。私、現場の職員に何人か聞いてみたんですけど、そうしたら、いいんじゃないですかと、いう話です。

むしろ、自信を持っていないで、めげちゃっている教官もいるのかもしれませんが、やはり法務教官という仕事は素晴らしい仕事だと私思っていますので、自信とプライドを持つ

てやっているという状況であれば、決してそのようなことはないのではないか。

その意味では、外部の方が少年院に入ってきて、そして、処遇状況であるとか、あるいは少年の生活状況等についてしっかり見ていただいて、御助言だとか提案とかしていただくというのは悪いことではないと、よいことではないかなというふうに思います。

ただ、機能的には、先ほど川崎委員のほうからもお話ありましたけれども、規模の問題とかいろんなものがありますけれども、機能的な面からいいますと、私は根本的に少年院と刑事施設というのは違うと思うので、その意味では、ただ少年たちの苦情を処理するというんですか、それに対応するというだけではなくて、もっと広報というんですかね、先ほど市川委員がおっしゃったみたいに少年院を知っていただくというような観点に立って、少年院で実施している処遇の内容であるとか、そんなようなことについても一緒に御助言なんかもいただければ大変にいいのではないかな、個人的にはそんなふうに思っています。

したがって、先ほど何人かの先生もおっしゃっていましたが、やっぱり教育の専門家であるとか、あるいは児童の専門家、福祉の専門家、いろんな方が入っていいと思うんですね。地域の方とか厳しくおっしゃっていただく方ももちろんそうですけれども、逆に少年院に非常に理解が深いというんですか、関心が高いというか、そういう方にも入っていただけるとありがたいのではないかなというふうに個人的には思います。

以上です。

○岩井座長 少年鑑別所の場合は、またちょっと少年院と違った問題があるでしょうね。よろしくをお願いします。

○小板所長 少年鑑別所は少年院以上に規模が小さいというところでありまして、施設単位での設置ということでの運用になりますと結構つらいところがあると思いますが、やはりそこはいろいろな工夫の仕方があると思いますし、部内の者、所内も含めていろんな人に聞いても、第三者機関を設置することについて消極的な意見を聞いたことがありません。やっぱり必要だし、積極的に受けるべきだし、様々な意見をいただきたいというのがほとんどであります。

唯一、その施設規模の関係でどのぐらいの単位、例えば県単位とか、もうちょっと大きなブロックとかという形で事務をとれるような形だと、うまくやれるのではないかという意見が多いように思います。

あと、少年鑑別所は少年院と比べますと地域とのつながりが薄いものですから、地元のいろいろな有識者の方々に目を向けていただけるという機会からすると、非常に貴重だなというふうに思います。

それから、少年鑑別所がしている仕事の中で資質鑑別ということになりますと、結構専門的な目を見ていただかなきゃいけない。また、今やっているやり方が本当に非行少年の処遇に十分役立っているものなのか、もう少し別のやり方でもって貢献するほうがいいのか、部内でも当然検討を続けておりますが、また違った目で、また違った価値観でいろんなご示唆といいますかアドバイスをしていただける、そういうのを応援団といいますか協力者の方々が入っていただけると心強いなど。

ですから、チェックしていただける、視察していただくというよりも、むしろ、いろいろ御意見をいただきたいといいますか、アドバイスをいただきたいというような期待が個人的には強いところであります。

以上です。

○岩井座長 どうもありがとうございました。

それでは、やはり鑑別のやり方とかそういうふうなものにも、第三者機関の目が入るというふうなことが望ましいというふうにお考えですかね。

○小板所長 個人的にはそう思っております。やっぱりいろんな視点から鑑別って実施すべきだと思いますし、今のやり方以外の違ったアプローチといいますか、もっと重点を移していくべきだとか、対象者をもっと広げるべきだとかいろんな考え方があると思いますので。

○門脇院長 すみません、ちょっとよろしいですか。影響という話が先ほどありましたけれども、広田委員のお言葉をかりれば委員会の暴走というんですかね。具体的にどういうふうになってしまうと、少年院の現場で困るかということだと思うんですよね。

やはり少年院においてこの第三者機関というのは初めての体験なので、どういうふうになるかというのは分からないんですけれども、例えば私、少年刑務所の勤務があつて、そのときにちょうど刑事施設視察委員会の会議に出たことがあるんですけれども、刑事施設の方では提案箱とかそういう形で実施されていますけれども、果たして少年院の中でそういうふうにした場合、どうなるんだろうか。おそらく、少年院の集団の質というのが高いときというのは、むしろ何である人あんなことするのかなというような、そういう少年集団の目もあるでしょうし、ですから、実施の方法とかは慎重に検討していく必要があるなというふうに思います。

少年院というのは、もともと身柄を収容して、そして本人のやりたくないとかやりたいとかということとは別に教育を与えていく場所でありますから、そういう意味では、いろんな不満とかものが出ると思うんですね。それが一つのいわゆる人権の問題として問題視されていくと、実際、教育の現場の指導をしている者はお手上げの状態になってしまうみたいなことになると

ちょっと大変だなと。そんなふうに、そういう意味では、ちょっと影響というようなことも配慮していただきながらやっぱり考えていただければありがたいというふうに思います。

以上です。

○広田座長代理 今のお話ともちょっと関わりますけれども、例えば学校で今いろいろ外部の人が入ってきて評価をしたり学校参画で一緒にやったりしているんですけれども、そこで出てくる一つの問題が、要するにプロセスを、いわゆる教師はある意味で教育の専門家としてそれなりにやっていくわけけれども、そこをいろんな素人教育論がぼんぼん出てきて、みんなで足の引っ張り合いをやるようなことが起きてしまう部分があるんですね。

難しいのは、さっき資質鑑別も助言していただいてとかありましたけれども、例えば教育について僕が助言するとかしてくれと言われたらすると思うんですけれども、それが果たしてそれぞれの施設の現状に合っているかどうか分らないまま提言したりせざるを得ないんですね。その文脈が分らないまま、その専門家が提言することの危うさというのはいつも感じるので、そういう意味では、あまり本体業務の日常部分まで含めて何かやるとかというふうな話をメインでどんと制度化しちゃうと、かなりやっぱり施設としたらしんどい、現場はそうじゃないぞと言いたくなるようなことが起きるから、その線引きをちゃんと考えておかないといけないんじゃないかというふうに僕は思いますね。

○石附委員 私が最初に申し上げたのは、今、広田委員がおっしゃったそのことだったんです。それが一番難しいということで、非常に専門性を尊重しないといけませんし、第三者委員会がそこまで介入することを自分たちでどう考えるか。

もう一つは、私は被害者支援というのに関与しておりまして、ボランティアの指導だとか何とかやっているんですが、被害者が少年院へ行きまして、少年の処分についてずっと不満を持っていた人が、本当にちゃんとした認識ができるようになったというんですか。それはやっぱり現場を見て変わったんです。

被害者の方が今少年院へしょく罪のための教育でお話に行かれるわけですね。そして、そのときに直感で感じるものがあつたようなんです。そういうことを思いますと、やはり被害者の目というのが大事だなと思いつながら、例えば第三者委員会の中に被害者が入ったら、非常に問題が大変なことになる可能性はある。だけど、その視点も必要であるというふうに思いましたので、そういう意味で今、広田委員がおっしゃったように、ああいう少年院の非常に特殊な健全育成ということを専門的に理解できる必要がある。そういう意味では、刑事施設とは違うように思いつまして、もうちょっと教育内容というのが特殊なものを持っているので、そこが専

門的視点をもって検討することが必要で難しいだろうというふうに思っております。

○市川委員 広田委員と違う考えかもしれませんが、第三者委員会は権利擁護のためであるわけで、その専門性まで特に論じるかどうかというそれは違うんじゃないかと思います。逆に言えば、今の社会は医療も福祉もそうなんだけれども、専門性がある人間ほど、専門外の人の質問にきちっと説明することを求められているわけです。大相撲なんかまさしくその代表だと思います。

専門性があるんだから我々が正しいという論理は、今一番攻撃される材料になると思います。専門性のない方にきちっと説明してあげられなければ、その人は専門性はないんだろうと思っています。あくまでも第三者委員会は権利擁護のことについて論じるのであって、施設の細かい指導の内容まで口を挟むとはちょっと思えないんですけども。

○影山委員 よろしいですか。私も矯正教育の専門とかである必要は全然なくて、多分教育の専門家であったり、法律の専門家であったり、福祉の専門家であったり、あるいはもう特に専門はないけれども地域の人であったり、ある意味では少年院にとっては素人さんみたいな人が入っていて全然構わない。素人感覚で少年院のことはあまり知らないけれども、これって社会で見ると少し変に思えるけれどもどういうことっていうふうな質問があっても全然いいんだろうな。それに対してちゃんと説明していただいて、ああそういうことなのかということであればいいのかなと思うし、それから、でも、先ほど私が申し上げたのは、あまりとんちんかんではなくて、その施設のやろうとしていることを一生懸命知ろうとするとか、そういう理解を深めようとする姿勢のある方になっていただく必要はあるのかなというふうに思ったりいたしました。

それから、先ほどの人権のことなんですけれども、少年院というのは収容をして、そして、そこで強制的に教育を行っていく健全育成を目指すそういう場所ですので、ややもすると、そのパターンリズム的な感覚が高じてしまうと、人権侵害というのが起こりやすい場所でもあるんですね。

そこをしっかりと職員の方々が理解をすることが必要で、よく聞くのは、人権を強調すると、例えば指導が入らないとか教育が後退するというふうに言われる方がいるんですけども、正しく理解して人権をしっかりと少年院の中でもやっぱり人権はしっかりと保障されなければいけないし、むしろ、人権をちゃんと理解していない子どもたちが人権侵害を犯してあそこに入っているわけですから、しっかりと人権を教え込んでいかないといけない。そこを職員が人権侵害なんかやって、ちゃんと、でも、おまえは人権を理解しろなんていうのはあり得ない話です

から、やっぱりそこはしっかり人権が守られる場所であって、今まで人権が守られてきていなくて、そして人の人権を奪ってしまったような子どもたちに対して、本当の正しい人権感覚ってどういうものなのかということ少年院の中で学んでもらいたい。そういう場所だと思うので、人権を強調し過ぎちゃうと教育が後退するとか指導が入らないという感覚を職員の方々が持っていただくのは、ちょっと困るかなと私は思ったりします。

だけど、その人権、人権というのが、多分、結果論としてはそんなに現場と私が言っているのは違うとは思わないんですね。細かい何か、これも人権、あれも人権みたいなことで言ったときに、現場がそれでは立ち行かないというのは、おそらくそこは人権の理解が正しくないのではないか、そこはちゃんと説明できるはずだと私は思いますので、そういう意味では、職員の感覚として人権をあまり強調し過ぎるような視察委員会であっては困る的な感覚を持っていただくのは、ちょっと違うのかなというふうに思います。

○広田座長代理 市川委員も影山委員もおっしゃることはそのとおりで、個別のケースで権利擁護をきちんとしていかないといけない。それは今までよりはもっときちんとしていかないといけないし、と思うんですね。そのときに、いや、ちょっと行き違いがあるのは第三者機関の役割をどう考えているかのところで、運営に関して意見を出すとかというときに、個別のいろんなケースでこんなことが出ているけれどもどうなんだとかというのは、きちんとしていかないといけないんだけど、運営全体に対して意見を言うときに、だから、しばしば専門家として教育学者が教育学者として何かこうやったほうがいいですよとかという、それが必ずしもその施設の論理とは違うところの提言をしてしまうような可能性を感じてしまうんですね。地方の国立大学の教育学者が、例えば少年院を初めて見に行って、自分の教育学の見識でこうやったほうがいいですよと言って来年から変えてくださいというようなことを言われたら、きっと施設は困るだろうなとかって、そういうふうなことを考えたわけです。

○市川委員 そんな人は教育の専門家かどうか知りませんが、その少年院の専門性ある方が「それは無理でございます」、「間違っています」と主張すればよろしいだけじゃないんでしょうか。肩書の偉い人が言ってきたから、そうしなきゃいけないということもないと思います。

○毛利委員 多分、これから委員会で、もし入られる方が、僕が6、7年前に初めて少年院に出入りするようになったときのびっくりしたような気持ちをおそらくお持ちになると思います。なぜかという少年院のなかの世界観は外の世界より古いんですよね。院の中の空気は、20年か30年ぐらい前のニッポンという感じがするんですよ。それは、例えば、おいっちにおい

っちにという行進だったり、あと、特別少年院で見たんですけれども、新入で入ってきた再々入ぐらいの少年にあいさつを教えているんですけれども、それは強いているわけじゃないんだけれども、法務教官がお手本として絶叫しているんですよ。もう、もし街中でやったら気が狂っていると思われるようなことをしているんです。

だけど、そうやって独特の空気を作って集団性みたいなものを醸し出しているところがあって、そここのところに対する社会との落差を見たときに、外部の人がどんなふうに対応するのかは未知数です。僕は人が入ることはすごくいいと思っていますし、その人たちがやがて応援団になるとは思っていますけれども、きっとすごいショックを受ける人がいっぱいいて、そのショックが少年院の評価につながることもあるかもしれないので、そうすると、それはどう考えていけばいいのかなということに危惧しています。

本当にちょっとタイムスリップしてみたいな世界なんです。おそらく文化的な摩擦みたいなやつが起こるんだろうなと思います。えも言われぬものがあるんですよ。

○市川委員 その初めに感じた感覚というのは重要なんじゃないんですか。おそらく少年院でなくても精神科の病院だって、児童自立支援施設もそうかもしれないけれども、初めはみんなそう感じるのです。長くいるとそれが当たり前になってくるのが怖いわけであって、なぜそう感じるかということに大切にしていける必要があると思います。

○廣瀬委員 市川委員が言われるとおりで僕も思うんですけれども、おそらく各施設で、例えば外部委員が何か言ったときに市川委員のようにき然と対応できる人ばかりではないだろうと僕は思うんです。そういう意味での弊害が出てくるおそれは間違いなく個別にはあるだろうと思います。特に、最初の段階では対応の仕方が分からなくて非常に困るということもあるだろうと思うんですね。まさにその辺のところの人の手当て、対応する職員のほうのサポート体制みたいなこともきちんとやって導入していかないと、最初に大失敗するようなことになる、なかなかうまく制度として立ち行かないんじゃないかと思います。長い目で見れば、知らない人を説得できなくては仕方がないと思いますし、きちんと見てもらってれば、今の少年院の全体では応援団が増えていくんじゃないかと思いますよ。

ただ、導入の仕方は、かなり慎重にやらなきゃいけないと思います。それから、それなりのサポート体制、受け入れる側の体制づくりをきちんとしないとうまくいかない面もあるのではないかという気がします。

○市川委員 第三者委員会の権限をどうするかということはまだ詰めていないわけです。私が知っている熱心な第三者委員会の委員の方だと普段から顔を出してくれて、中の様子を非常に

よくつかんでくれて、利用者とお友達になる人まで出てきます。廣瀬委員がおっしゃったように、とげとげしい関係にはならないように思います。徳地委員がおっしゃった、「初めはみんなびっくりしたけれども、今考えてみればもう入れるのは当たり前だ」というせりふが当てはまると思います。皆さん頭の中に考えているものがちょっとずつ違うので、御心配があったり何とかなるだろうと思ったりしているだけではないかなと思います。

○門脇院長 毛利委員がおっしゃった文化的な摩擦みたいな感じがするところというのは確かにあると思うんですね。だけれども、そのことが実際、私、少年院にいるものですからあれですけれども、極めて少年が成長する上で必要なことなんですね。と思って、自信を持ってやっています。それはもちろん限度の問題がありますけれども。

昨日、私、中学校へ行って講演をしてきました。400人ぐらいの子どものうち、20人から30の子はこんなになって態度が非常に悪い。少年院ですとあれは注意しますね。きちっとして人の話を聞きなさいと。学校の生徒は言うことを聞きませんね、少年院で何回か注意して言うことを聞かない場合は、ちょっとこっちに来なさいと言って指導しますね。

つまり、ああいう態度をさせておいていいのかどうかですね。つまり、人の話を聞く態度としてそういう態度、姿勢で良いのかということ、一つ一つ教えていく。これが自分自身が今まで持っていた不良文化に対して自分自身でメスを入れていくという作業になるわけですから、それは確かに文化的な摩擦があるかもしれませんが、非常に意味のあることをしているということをお理解いただければありがたいということ、それから、先ほど影山委員のほうからありましたが、ちょっと誤解を受けたような感じがしますけれども、私も影山委員のおっしゃるとおりだと思います。

ただ、こういう事例がありました。私も大臣申立の一步寸前まで行ったんですけれども、少年が父親に手紙を書きました。どういう手紙かというと、少年院で虐待を受けていると、僕は。面接しました担任が、そうしたらば、じゃ、ちゃんと院長申立をなささいということで、院長申立をする。そして、私が面接をしたんですけれども、どういうことと。どのだれか先生たちに何か虐待みたいな君自身が感じたことあるのと質問しました。そうしたら、彼が言うには、いやいや、うちのおやじというのは、このぐらいのことを書いて出さないと面会に来てくれないんですって言うんですよ。だから、私は言いました。それはね、お父さんもこんなことを聞いたらびっくりしちゃうよと。だから、少年院のほうでも分類を通してちゃんと保護者の方にお父さんに面会来るようになって働きかけるから、君もこんな脅かすような手紙は書かないほうがいいんじゃないかと。彼は、そうですねって笑いながら寮に帰りました。

次の日です。弁護士さんに手紙を書きました。院長に私は言いくるめられたと。こういうことってというのが結構あるんですね。

ですから、先ほど市川委員がおっしゃいましたけれども、人権擁護の権利の問題だけではなく指導の対象になる問題にもなってくるということが出てきます。その少年の付添人であった弁護士さんという方が、大変に理解のある方で、弁護士さんから、もうそんなこといつまでもぐずぐず言っていないで、自分自身の問題をちゃんと見つめて頑張んなさいと、こういう返事が来たんです。それで彼は自分自身のわがままを言う場所を失ったので、それからちゃんとやるようになるんですね。

いわゆるこれは少年院の特殊性というか、少年の特性だと思うんですけども、こういう動きがあって、非常にそこは微妙でデリケートな問題があるということでございます。

○岩井座長 皆さん、いろいろなものを構想していらっしゃると思うのですけれども、何か具体的にどういうふうな第三者機関というふうなものを設けるといいというふうなお考えがありましたら、お話しいただきたいと思うのですけれども。

○毛利委員 きっと弁護士会は必ず協力してくださるんですよ。僕は大分にいるので、大分に学識経験者とかそんなにいるのかなというのが最初に思ったことなんです。見識の高い人が地方で、そんなに人数が集まるのかな。東京ならあつという間に集まると思うんですけども、それをどう手当てするのかという問題でいうと、それは弁護士会が必ずそれにつき合ってくれないと人権チェックというのはできないだろうなというのと、どのぐらいの大きさにすれば適当なのかなというのがちょっと悩ましいところだなと思いました。

○岩井座長 鑑別所のように非常に小規模なところもありますし、一つ一つの施設ごとというよりも、何か県単位とかというふうなそういうふうな構想も検討されるのでしょうかね。

○毛利委員 徳地委員に最低何人は必要だという、今までのご経験を伺うのも一つの参考になるんじゃないかと思うんですけども。

○徳地委員 児童自立支援施設の場合は、大体が3名から5名なんですね。これはすべて施設長が第三者委員を選任する一つの権限がありますので、実際、施設長に任せるべきで、やっぱりその委員を作る場合は各職員が集まって、今度このような制度を作る必要があるので、委員にどのような方が必要か意見を出してもらいまして、最終決定はもちろん施設長がやるということ。

私のところの場合は、当然弁護士の方にも入っていただきまして、子どもの権利に詳しい弁護士さんなもので、私は随分議論をしました。例えば、中学3年生の2学期に入所してくる子

に関しての高校受験の話が出まして、私は生活態度もしっかりしていないし、入ったばかりですが、当然高校受験したら受かります。半年間施設に入所しただけで家庭に返して高校に通わせても、途中でドロップアウトするのは目に見えていますから、私はできたら1年、過年度に高校受験させるべきじゃないかという話をしたんですけども、弁護士さんは、それは本人の権利だから、施設の施設長であるといえども本人がそういうふうな意思があるんだから、これはちゃんと3月には高校受験させて、もし高校に合格したら家庭に帰して家庭から高校に通学すべきじゃないかということで、私と意見がぶつかったことがあったんですけども、彼は高校に落ちてしまったもので、これは冗談のような冗談でないような問題なんですけれども、先ほど市川委員が言われましたとおり、必ずしも施設のことばかり理解している人の集まりじゃなしに、やはりいろんな方が集まっていろいろ意見を出してもらって、そうしなければ処遇が向上しませんし、また、本当に子ども、いわゆる利用者の権利擁護ということに関してもそのような人の意見がなければ、施設というのは今まで施設完結型の意見が非常に強いもので、その点に関しては職員の意識の変革することが当然必要なんです。

ですから、委員の人数と委員の選抜なんですけど、途中で変更した委員は1人もいないんですね。もうできて8年経つんですけども、8年間そのメンバーのままなんです。ということは、実際、年2回集まってきまして、それで、弁護士さんなんかは生徒の前で、委員はあいさつするわけですね。私の子どももちょうど中学3年生で君たちと同じぐらいの年齢です。いろいろなことがありましたら私のところに電話するなり手紙書くなりしてくださいということで。後で説明しますが、各委員の電話番号を全部書いてありますので、子どもが電話するわけにはいきませんが、保護者に頼めば保護者から委員のほうに電話することができます。○影山委員 委員の数なんですけれども、委員に選ばれた以上ちゃんと会議には出席はしてもらいたいとは思いますが、どうしてもいろんな特別の事情が絶対ゼロとまで言えないとしたら、例えば3名の場合、1人の委員がお休みになってしまったときに2人になってしまうというのは、ちょっと難しいのかなと。3名だともう絶対休みなしの前提での制度設計になりますので、最低4名以上は多分必要ではないのかなと。できたら、もうちょっといろんな専門の方、地域の方なんかを入れると5、6人からぐらいというイメージになるのかもしれない。

職員のほうの対応とか考えたときに、人数が多いと職員の対応が大変かというところもちょっとまいちよくそこは分からないので、選べるんだったらやっぱり5、6人か6、7人かぐらいでもいいのかなという感じはしないでもありませんけれども。

それから、できたらやっぱり各施設ごとに、ただ、少年鑑別所が若干私も悩ましいなという

気はします。そこは何か工夫があればあってもいいのかなと思います。少年院もできたら原則的には各施設に1つの委員会があったほうがいいかなと思うんですけども、例外的に、例えばということは場合によってはあってもいいのかもしれないのと、また一方において、いくつかの施設をその委員が見れたりすると、特別少年院と、初等少年院と両方見ていて、その違いがある程度、ああ随分違うんだとか、あるいはそれぞれの少年院ごとに本当にやり方が随分違うところがきっとあるかと思うので、そのあたりを両方の目で見るというのも、またおもしろいことなのかなとも思うんですが、ただ、逆に言えば、各少年院は本当に少年院ごとに独自のやり方を編み出しておられたりするところがあるものですから、それともう一つは、少年院の数って刑事施設よりも多分少ないんですかね。

○少年矯正課長 若干少ないです。

○影山委員 若干少ない。いずれにしても、一つ一つの少年院が一般的に、仙台みたいにくっついているところもたまにはあるとしても、大体離れているはずなので、複数の施設を視察委員会が管轄するというのには一般的にはちょっとしんどいような気はします。

それから、投書箱に関して、これはあいつ投書したな、変だとかいろいろまた処遇のやり方で問題が出てきてしまうと困りますので、そこは何か工夫をしていただきながらでも、やっぱり自由に何かこう投書できるようなシステムはあったほうがいいと思うんですが、それはせめて、例えば視察委員の委員長さんなんか最低限月1回は開きにいつてみるとかいうふうなことはやってもらいたいなというふうに思っています。

○岩井座長 皆様、第三者機関を何らかの形で有効な適切なものを設置したいというお考えのようですけども、そのほかに施設運営の透明性を確保する手段や有効な方策というものは考えられますでしょうか。今までのものとしましては、内部監査とか情報公開、それから地域社会との連携をなるべく図っていくというふうなことが行われておりますけれども、何かそういうところに皆さん御意見ございますでしょうか。

○毛利委員 この第三者機関の問題もあるんですけども、やっぱり定期的にある程度の数の人に視察をしてもらうのに施設がなれるというのは一つの手なのかなと。月に1回なり月に2回なり必ず市民の人も含めて10人ぐらいの人が、施設をひとわり処遇の様子とかを見ることができるというのを、そういうことになれるようにする。そして、見たいという人がいたらきちんと見られるようにする。それは手紙を出して院長の許可をもらえれば今でもできるんですけども、それを特別意識が高くて少年院の実情を知りたいという人じゃなくても、月に1回ぐらいは見られるようなオープンな制度をつくって見てもらうというのは、一つは手なのか

もしれません。

大分の場合、中津少年学院は地域の人と夏に盆踊り大会をするんですね。それで、結構、100人ぐらいの人たちがやってきて、一時期やめたこともあるんですけどもやっています。その代わり、校庭にこうこうと何か戦争のときに使うようなサーチライトがあって、周りに職員の方がきちんと配置されていて周りを取り囲む形でやっているんですけども、地元の方はかなりすんなりと入ってきて、一緒に楽しく盆踊りを踊っていらっしゃいますので、そういうのも機会を増やしていけばそれなりのことがあるのかなとは思いますが。

○岩井座長 どうぞ。

○市川委員 私は別のことを考えていて、透明性ということではないのかもしれませんが、外の目が入るということは非常に重要だと思います。精神科の病院でも、その中の密室性という課題があります。できることを考えて、見学を希望する方をなるべく受け入れていました。悪意があつて来た方は困るけれども、本当に興味を持ってくださる方は、なるべく受けるという方向でした。逆に言うと、職員にとっても「あなたたちは注目されているんだ」ということを意識してもらいたいからです。密室性を排除したいということにつながると思います。自衛隊の体験とは違いますから、少年院体験は難しいかもしれませんが、密室性の排除は必要だとも思います。もちろんプライバシーの問題は配慮しなければいけません、少年院が外の社会と別世界ではまずいと考えます。これは透明性を高めることですが、職員のモチベーションを高めるのにも意味があるという気はしております。

○毛利委員 そういう意味でいうと、僕が篤志面接委員になったのもそれなんですよね。僕は大阪弁護士会の弁護士さん経由で推薦があつて、宗教者以外ではかなりの若さで入っているんですね。他は校長先生や家裁調査官をやめられた方とかそういう方なのでかなり高齢の方が多い。そういう意味でいうと、地元の新聞記者に篤志面接委員を半年やらせてみる。それは文章の書き方は教えてもらえばいいんです。新聞記者にとっても、とてもためになると思うんです。少年院は1回だけでは理解しにくいですね。やっぱり何回か行って、少年の難しさとかそういうことがわかったときに初めていろんなことがわかるので、処遇全体の流れとか少年院の空気を知るために何度か来てもらうような機会をつくらないと本当の理解者はできないのかもしれないと思います。篤志面接委員の枠を臨時的に広げることはできないでしょうか。

○影山委員 少年院自身が、例えばもっと広報の努力とか、学校の教育の中の実践ですごく成功した例とかって結構本がたくさん出たりしていると思うんだけど、もっと積極的に例えば出版して見たりとか、今でも努力されていると思いますけれども、もっともっと少年院の中

でやっている教育の在り方なんかに関して広報の努力をしていくというのが一つと、それから、一般市民が例えば盆踊り大会とか運動会とかいろんなところで入ってくるのはいいと思うし、それから、職員の数が少なくて、結構職員の皆さん方が苦勞しているというふうなこともあるんであれば、毛利先生のような篤志面接委員もそうなんです、いろいろな例えば教育の場面で、あるいは部活動の場面でレクリエーションの場面でもっともっとボランティア的な、それも各少年院でやっているところとやっていないところと、すごくオープンなところとそうでないところといろいろあるようなんですが、やはりまだまだのところはたくさんのいろいろな能力のある人たち、スキルのある人たちをボランティア的にでも少年院に入ってもらって、そこで一緒にやっていくというふうな実践をもっともっと広げていけたらいいのかなと、そんなふうに思います。

それから、今日、無立会合会についての私の意見を委員の先生方に配らせていただきましたけれども、元付添人、少年審判のときに付添人をやった弁護士などがその後の少年のことを心配して時々会いに行ったり、それから、出院間際になるとその後の環境調整のために弁護士が会いにいたりするようなことも時々あるんですが、そういうふうなときに職員の立会いのない状態で弁護士に会わせてもらうというふうなこともぜひお考えいただきたいなど。

これも透明性確保の一つのありようではないのかなと、そんなふうに思っておりますので、これもご検討いただければと思います。

○市川委員 影山委員のおっしゃったことでいうと、もうちょっとマスメディア対策を考えるべきではないかなと思います。新聞を見ていると「少年院に行ったけれども、また悪いことをした」ニュースが目立ちます。うまくいって社会で頑張っている人がいることをもっとマスメディアを使って知らせるべきだと思います。再犯のキャンペーンばかりだったら、少年院って役立たないと思われかねないのではないのでしょうか。

うまくいっているケースを示して、もっとマスメディアと仲良くなって理解者を増やしていく努力をするべきだと思います。

○広田座長代理 僕も本当にそれに同感で、マスコミにもっと発信していくときの方針とか基準とかというような全体で何か作られているんですかね。あるいは考え方の方向とか、矯正局の方で。何か個別の施設が個別に努力するような話になっているのか、それとも、何か全体として少年院の広報とか発信について基準とか考え方があるんですかね。

○少年矯正課長 そうですね。様々なケースがあり、少年のプライバシー保護の問題等もありまして、現時点では全体的な方針等を網羅した基準のようなものはないのが実情であります。

ただし、少年院の矯正教育、あるいは少年鑑別所の資質鑑別などを国民により理解していただくために積極的に見学・視察を受け入れたり、マスコミ等の取材等があれば可能な範囲で積極的に応じるべしというような包括的な指示といますか指導といますか、そういうことは様々な機会に実施しているところでございます。

○広田座長代理 今、市川委員が言われたような、これだけポジティブな役割を果たしているとか、そういうのをもっと押していくためには、それは個別の施設が個別に何か発案するよりは、やっぱり局としてきちんと社会に発信していく仕掛けみたいなものをつくっていかないと難しいんじゃないかと思うんですけれども。

○毛利委員 今まで僕がそういう役割で中に入ってきて思うのは、もうすべて院長先生の人格と度量次第に任されていると。多分、そうだと思います。院長先生が勇気があれば入れることができるし、勇気がないと入れることはできないということなので、やっぱり正道的にメディアに対してどうするかということ、だれが院長先生になっても入れて中を見れるように仕組みを作らないと、もしかしたら院長先生のその記者に対する好悪とかと、そういうことでも入れなかったりというような壁が、院長の裁量というところで遮られてそのままになったりしていることがあるかもしれません。

また全体的な話をすると、僕も今までの書かれたものを見ていますけれども、法務教官が自分の仕事を客体化して書くという経験がほとんどないんですよ。要するに、法務省の本っているいろいろあるんですけれども、全部受刑者がどういう人だったかという思い出話とか、どういうふうによくいったかというのは書いてあるんですけれども、自分はどういう仕事をしたかということを振り返って書いたものって意外に少ないんですよ。

だから、そういう訓練というか歴史がないということが一つにはあります。また、少年法の少年のプライバシーの問題が言わなくてもいいやという後ろ盾に、無意識にはあれ使われてきたと僕は理解しています。しかし、役人が税金を使って仕事をしているわけですから、我々が何をしているかということの説明責任はもちろんあったはずで。ところが、なぜか少年法の陰に隠れて少年のプライバシーをおれたちは言えないからという理由で、おれが何をしているかは語らずに来たという戦後の歴史があるんだと。すみません、厳しいことを言って。

○廣瀬委員 僕もマスコミには随分対応していますけれども、簡単ではないのは間違いないですよ。いろんな人がいますし、うっかり入れればすごくマイナスになることもたくさんあると思いますよ。そんなに甘いもんじゃないと思いますね。

やるとすれば組織的に、制度的に、ちゃんと何回も見てもらって、きちんとわかるようなシ

システムでやらないと、それは弊害もまた間違いなく出てくると思います。

それから、うまく立ち直ったという人に関しては、まず本人の問題が非常に大きいですね。ちゃんと了解してくれなきゃいけないわけです。だから、もともとのところはやっぱり非常にほかの分野とは違ってやりにくいところがすごくあることも前提に置かなきゃいけない。やるとすれば本腰を入れ、予算、人も手当てしてやらないと、中途半端に通達を出してなるべくやりなさいなどといって、うっかりやったら大けがするというような気がします。

だから、その辺は非常に難しい。今、毛利委員がおっしゃったようなこともないとは思わなけれども、そういう面よりは、ハードルがいろいろ高かったのも間違いなのだと思うのです。○市川委員 これは制度の問題ではなくて対応の問題だと思います。逆に言えば、廣瀬委員がおっしゃったとおりで、いかにマスメディアの中に理解者を増やしていくかが重要だと思います。マスメディアにはいろんな考えの人がいるわけですが、あまりにも理解者が少ないので理解者を増やす努力はすべきだと思います。この仕事は、最近の言い方でいえば、タックスイーターをタックスパイヤーにかえる重要な仕事だと思います。

重要である点をもっとアピールしていくということは、職員のモチベーションを上げるのにも意味があると思います。

アパレルで成功している方がテレビに出ていて、自分は少年院に昔いて、あれから立ち直ったと言っていました。少年院の存在意義に使ったらいいと思ったので、申し上げました。同意してくれる方がいたらそういう方をお願いして、今よりも理解者を増やしていくということが重要じゃないかと思って申し上げました。

○岩井座長 どうぞ。

○石附委員 今までのお話を聞いていまして、私はやっぱり社会の中に少年の矯正教育は何がなされていて、そして、実際どのようになっているかという実態を一つ一つ伝えていく仕事というのは、マスメディアを通じなくても多分できると思うんです。私は、先ほども申しましたけれども、被害者というのはもう少年が少年院に行ったというだけで保護に何でされなきゃいけないの、私たちはこんなに痛い目に遭っているのにという、そういう非常に被害感情をぬぐいきることはできません。

しかし、ある被害者は、10年、15年たってインテグレートできて、そして、少年院へ行かれたときに、少年院の教育を学校が取り入れたらいいのにと、こんなふうに言われたんですよ。何かそれぐらい認識というのはやっぱり変わることができる。だから、私は、この間もちよつと言っていましたけれども、保護処分なんて名称ゆえに理解されにくいんだと思うんです

けれども、保護処分と言われたらどんなに守られてどんなにかわいがられてという、健全育成のためにどのようなことを現場がやっているかということ、それこそ透明にしたら、その辺が社会に理解されて、逆に言えば、それを広げることによって職員の士気も高まってまいりますし、大切なことをして、その少年がこんなに更生している。先ほどもお話にありましたけれども、再犯するとしても2割だということがもっとわからなきやいけない。

それともう一つは、そこまで行くにはどのような教育を、少年院がしているかということと、少年が体験できているかということをもうちよっとはっきり伝えていくことが必要であるし、私が外部審査のことで言いたいのは、組織と機能というところをもうちよっとならば明確にしていかなないと、だれが構成員になればいいのかということがちょっと分からない。明確にすることによってどんな人を構成員にすることが、あるいは何人ぐらいがいいのかということが明確になるんじゃないかと思います。

○市川委員 先ほど何人ぐらいがいいかという論議があったように思いますが、ここでそれを論議しても意味がないので、案を幾つか出していただいて、それを論議したらいかがでしょうか。

○石附委員 だから、機能だけはやっぱり明らかにして。

○岩井座長 皆さん、第三者機関の設置については非常に有効であるというふうな御意見だったと思うのですが、先ほどからもありましたように、やはり少年院の教育の有効性というものを外部の方に知っていただくということが非常に重要で、先ほど門脇院長がおっしゃったように、ひどく行儀の悪い態度に対しては指導をちゃんと少年院ではやるのだという。それが、結局、学校ではやはり行えないのは、学校では体罰が禁止されているからだというふうな、そういうふうに学校側では思っているかもしれないわけですね。

少年院では、陰できっと体罰などをやってびしびし指導しているのではないかみたいな、そういうふうなイメージがやはりまだまだ外の人にはあるのではないかという。ですから、どういうふうな形できちんと少年院での教育といいますか、その集団教育、厳しい教育というものがどういうふうな手段できちんとなされているのかということ、もっと外部の方に知っていただくという、そういう努力が必要なんだろうというふうに思うのですけれども。

ただ、この第三者機関が設置されれば、それですぐ理解していただくというのはやはり、毛利委員がおっしゃっていたようにすごく難しいところもあるかと思しますので、そういう広報の努力を引き続きなさるといふことと、それから、中の透明性の確保のために第三者機関、御理解いただけるような方に参加していただいて、適切な、そして委員の、職員の負担にあまり

ならないような形でそういう第三者機関が設けられるような、そういうシステムが考えられなければならないのではないかなというふうに思いますが、他に何か御意見ございますか。よろしいですか。はい、どうぞ。

○毛利委員 第三者機関が中に入って良し悪しを見るとき少年院でしていいことと悪いことというのがかなりきちっと決められていないと、さっきの言った文化摩擦で物を言われて、そのことでかき回されるというのではなくて、やっぱりこれは少年院ではしてはいけないよねということを決めておかないといけないんじゃないんですかね。その法律によってこれはだめなんじゃないですかと言わないと、水かけ論になっていっても困ると。そこはきちんと、何をしてもよくて、何をしても悪いのかということがどこかに書いていないと、第三者機関が入ったときに困ってしまう。

○岩井座長 まず、処遇の中の規則とか懲戒の規則とか、そういうふうなものを整備して、それに沿って評価していただくという。

○毛利委員 そして、そういうものを少年も理解して少年院の生活をして、そこから逸脱したときに不服を申し立てるという仕組みにしておかないと、それぞれが良し悪しがばらばらの中で議論するということになるんじゃないんですかね。そこがとても大切なような気がします。

○広田座長代理 委員会、第三者機関の機能ということにかかわると思うんですけども、にわか勉強で刑事施設視察委員会の方だと、目的は視察をして運営に関して施設の長に対して意見を述べるというふうな話で、基本は、個々の受刑者の不服申し立てを処理することは予定していないみたいな、そういうふうなことになってる。

ただ、しかし同時に、収容した受刑者に直接話を聞くことができるとか、何かそういうふうな範囲が決められているから、きっと少年院でもやっぱり同じように全体としての役割はこういうもので、委員会はここまでできて、これがという、その線引きをするんだと思いますね。

○毛利委員 今、これが適当かどうか分からないんですけども、少年院、刑務所もそうですけれども、週に2回しかお風呂に入れないんですよ。そうすると、これが、基本的人権を侵害していると少年が言ったときに、その第三者委員会はどのようにするのかという問題があって、そうすると、これはどうなるんだろう。どうですか、門脇さん、どう考えられますか。

○小板所長 お風呂の入浴の回数ですが、夏季は3回であります。それから、その日、少年が運動をしますとシャワーを浴びられますので、マックス5日ということになります。

○毛利委員 週5回。

○小板所長 が可能です。

○門脇院長 同じです。少年院のほうも。夏は汗をかきますので。

○毛利委員 夏は5回入れると。

○門脇院長 シャワーを含めますと。

○毛利委員 シャワーは浴びれると。それならいいんですけども。冬が週2日になっているんですか。

○門脇院長 はい。夏は3回ですが。

○毛利委員 週3回ですか。ずっと2回と聞いていましたけれども。

○川崎委員 夏と冬で違うんです。

○毛利委員 はい。

○川崎委員 刑事施設の第三者委員会から出たいろいろな意見に対して、施設限りで改善できると、それができなくて局や管区と相談しますと棚上げのようにになっているものがあるように資料の中にも出ていましたけれども、例えばお風呂の回数をもっと増やすということは、特に刑事施設では人数が多いから、施設の裁量だけで毎日入れるようにするというのは予算的に困難なことですよ。ですから、管区や局のほうに上げていますというような回答になると思うのです。そういうものがたくさんありますよね。刑事施設の実施例では。少年施設の方もそういうのがおそらく出てくると思いますね。

○岩井座長 どうもいろいろと御意見ありがとうございました。

それでは、第三者機関は設置するという事で、皆さんの御意見はまとまったということで、ここでいったん休憩に。

○少年矯正課長 座長、事務局からよろしいですか。

○岩井座長 どうぞ。

○少年矯正課長 先ほど市川委員から想定される第三者委員会の人員の問題や機能の問題など、具体案がないところでなかなか話がしにくい旨の御発言がありました。今日の御議論を通しまして、基本的に第三者機関は設置はすべしという御意見が大勢であると認識いたしましたので、できるだけ早く、当局のほうでデッサン的な形をお示しした上で、それを踏まえて、改めて御議論をしていただく機会を設けたいと考えます。

○岩井座長 それでは、いったん休憩といたします。

午後3時08分 休憩

午後3時25分 再開

○広田座長代理 それでは、時間になりましたので、会議を再開いたします。岩井座長が所用

のため退席されましたので、座長代理の私のほうで進めたいと思います。

それでは、2つ目の論点として不服申立制度について御議論いただきたいということで、被収容少年の権利救済、被収容少年に対する処遇の向上を担保するために不服申立制度の一層の整備を検討する必要があるというふうに考えられます。

そこで、少年院及び少年鑑別所において不服申立制度を整備していく場合、どのような方策が必要かといったことについて検討したいと思います。

まず初めに、少年院及び少年鑑別所における不服申立制度の現状について、矯正局から説明をしていただきますのでよろしくお願いします。

○少年矯正課長 第1回目の会議においても若干申し上げたところであり、また、事前にお配りしております参考資料にもより詳しく記載しておりますが、ここで改めまして少年矯正施設における現行の、少年が不服等を申立てられる制度等について、若干の経緯も含め申し上げたいと思います。

最初に、いわゆる院長申立制度について申し上げます。これは省令であります少年院処遇規則第4条に、院長は在院者から処遇又は一身上の事情に関する申立てを聞くため、随時、在院者に面接するよう努めなければならないという規定がありますが、その条項の一層適切な運用を定めた矯正局長通達に基づきまして、在院者から書面または口頭で少年院の長に対し、自己が受けた処遇または一身上の事情に関する申立てを行えるというものでありまして、不服申立制度そのものではないものの、その代替的機能を有するとされてまいりました。なお、この矯正局長通達は、平成18年12月に発出されております。

その後、昨年発覚いたしました広島少年院の不適正処遇事案等を受けて矯正局に設置された対策委員会におきまして、当時の制度に認められた問題点等を検討する中で、院長申立制度は在院者が不服等を申立てる手段として一定の役割は担っていたと考えられるものの、在院者の不服を把握する仕組みとして本制度のみでは不十分であるという結論が出されまして、新しく昨年8月4日付けの大臣訓令、「少年院在院者の苦情の申出に関する訓令」が発出され、9月1日から施行されているところでございます。

この制度につきましては、法務大臣に対しては書面で、矯正局や矯正管区から監査に赴いた監査官に対しましては、口頭または書面で苦情の申出を行うことができるものでありまして、その申出に当たりましては、書面の内容等につき少年、職員に対する秘密性を担保する措置等が講じられたところでございます。

この新しい制度によりまして、在院者の不服を上級官庁が直接に把握することが可能になり

まして、これを契機とした少年院の指導監督の充実、強化が図られるということになりました。

なお、先ほど申し上げた従前の院長申立制度、これについても一部改正を行いまして、申立ての用紙を在院者自身に封緘させ、院長みずからが開封するという原則としまして、秘密性の担保等に関する手続上の規定が追加されたところでございます。

なお、院長申立制度につきましては、平成21年1月1日から同年12月末日までの1年間、1,376件の申し出がされました。人員では445名の在院者から申立てがされております。また、大臣訓令に基づく苦情の申出につきましては、平成21年9月1日から平成22年4月末日までの8か月間、130件の申出がされております。人員では90名ということになります。

さらに、すべての在院者につきまして少年院の幹部職員が定期的な面接を実施しまして、在院者が自分から不服等の申立てを行わない場合でも、これを早期に把握し得る体制も併せて採ることといたしました。これも今年の9月でございます。

一方、少年鑑別所に在所する者につきましては、これまでも少年鑑別所において自己が受けた処遇に関する申立てにつきましては、収容中に繰り返し行われる面接その他適宜の方法を通じて把握されてきましたところ、在所者が少年鑑別所の長に対し申立てを行おうとする場合の取扱い等について、その一層適切な運用を図るため本年2月12日付け矯正局長通達「在所者による少年鑑別所長に対する申立ての取扱いについて」が発出され、3月から運用が開始されたところでございます。運用開始から約3か月が経過した今年の6月末日までの申立て件数は37件、人員にしますと21名になっております。以上でございます。

○広田座長代理 ありがとうございます。

続いて、徳地委員からの武蔵野学院の苦情申立ての話をお説明いただければと思います。

○徳地委員 ちょっと、すみません、風邪を引いているのでせきが途中で出るかと思うんですけども、ちょっと説明します。

実は、この苦情解決の仕組みができましたのは、先ほどちょっと申しましたとおり法的な根拠としまして、社会福祉事業法というのがあったんですが、これが平成12年に社会福祉法になりました。その中に、社会福祉サービスの利用者の苦情についての解決の努力というものが1個入っておりました。それに伴いまして、児童福祉法の最低基準も改正されまして、これは平成12年9月に施行されたわけですが、この中に苦情受付窓口の設置を義務づけたわけなんです。

各児童福祉施設、老人施設なんかもそうなんです、これを法的根拠にしまして、各施設、

苦情解決に対して義務づけられたわけです。これも具体的に、民間の施設が多いもので、経営者に対して利用者からの苦情に適切に対応するための必要な措置をとることが義務づけられたということで理解していて結構です。

この第三者委員とか、あとはいろいろ名称があるんですが、苦情解決委員会とか、場合によったら子どもの委員会の名称で呼ばれております。それで、これは私の施設の58か所、児童自立支援施設があるんですが、全部の施設にこれはもう既に入っております。

先ほど申しましたんですが、それまでは施設完結型ということで施設がすべてもう任されてやったという時代がずっとずっと続いたわけです。当然、この制度が入ってきたことによりまして、職員のやはり意識を変革することが大きなことでした。

これが具体的に何でこんなことが必要なのかと申しますと、利用者の確固とした信頼関係によるようなことがずっと施設の一つの実践であったわけなんですけれども、子どもの成長過程においてはやっぱり子ども自身の思いと、また、職員の考えが一致するとは必ずしも言えない。また、そういうふうな場面とか状況が必ず生じるわけなんです。職員からしますと、子どもとの信頼関係ができていのに何でこんなことだというような、一見不条理な子どもの行為だということもあるんですが、しっかりそういうふうな子どもたちからの、利用者からの声をしっかり受けとめていくことが大切であるということですね。

その仕組みの一つが第三者が関与する、いわゆる苦情解決委員会というものが必要になったわけです。子どもたちの声からいきますと、この苦情というものは子どもの声、いわゆる意見の表明ということなんです。それから、苦情の施設サービスの在り方を指し示してくれるものだということ、また、子どものそういうふうな苦情の表明というものは、子ども自身の成長する一つのかぎとなるんじゃないかという、見方をされております。

職員からしますと、そういうふうな職員自身が子どもの権利の重要性を学ぶ一つの機会だということにとらえております。

いずれにしても、苦情の密室化を排除する。もし、そういうふうな訴えがあった場合、それに対して迅速かつ、また適正な解決の促進、それからまた、職員の一層の信頼性とか適正性の確保、こういうふうなことが具体的にやられたわけです。

それから、その次なんですが、ちょっと武蔵野学院の入所児童の権利擁護、この苦情解決の仕組みを説明します。この仕組みに関しては、生徒が入所するとき、保護者、それから本人、それから児童相談所のケースワーカー、場合によりましたら学校の先生、たまに家裁の調査官等と一緒に同行して来ますので、入所のインテークの段階でこの入所児童の権利擁護、苦情解決

の仕組み等を説明したり、学院生活のしおりというものもあります。こういうふうなものも参考にしまして、入所のときに同行する者に対してインフォームドコンセントをするということです。

それと、苦情解決につきましては、これは後からの武蔵野学院の仕組みと同じなんですけど、意見箱というものを武蔵野学院では設置しております。これ全部で4か所設置をしております。子どもたちが勉強する学習棟があるんですが、いわゆるこれは一般学校の職員室の前に置いてあるようなものです。それから、職員が休みのときに特別な寮があります。その特別の寮の中にも意見箱があります。それから、行動の自由をする強制的措置寮、ここにも1か所あります。あとは、子どもたちが三食、寮舎のほうで食事をしますんで、それをつくります炊事場のほうにも意見箱を設置しまして、それで、意見に関しては記名、無記名、これは本人の自由ということになっております。こういうふうな意見箱に自分たちの意見を入れまして、それで、この意見箱には必ずかぎがついておりますので、生徒が一回入れましたら自由に取ったり出したりすることはまずできません。

それで、苦情受け付け担当というのがおまして、この担当者、うちの場合は精神科のドクターの医務課長と調査課長が担当になっておりますので、週に1回、この4か所の意見箱をかぎがかかっていますのでかぎを持って行って、それで入っているかどうか、もし入っていたらその意見を持ってきて、それでどういうふうな意見かというものを調べまして、それでそれを苦情解決責任者の委員長のほうにすべて申立てるということになっております。

それで、その意見に関してどういうふうな意見があつて、だれがどういうふうな意見を述べたか。記名の場合は直接本人を呼びまして、本人に説明する。もし本人に説明する前に寮舎担当の寮長にそういうふうなことも報告することもあります。

それから、第三者委員というものが武蔵野学院の場合は4名おります。先ほど言いました弁護士さんと、それから現場経験の豊富な方で、これは児童相談所の所長、それから、児童自立支援施設の管理職の方が現場経験者ということで1名おります。それから、学識経験者として大学の教授の方を3名、それから、今から4年前に武蔵野学院も学校教育が導入されたので、学校の校長先生を退職された方が1名おまして、現在のところ4名の方が第三者委員ということで、それで年に2回、その第三者委員の方に来ていただきまして、今まで生徒が意見箱に入れました意見についてこういうふうな意見がありまして、こういうふうなことで対応しましたということを逐一文書をもって報告します。

それで、先ほど言いましたように、無記名、それから記名のものがあります。大体3分の1

が無記名で3分の2が記名です。じゃ無記名の場合はどうしたものかということで、その場合は毎週月曜日、朝会がありまして、必ず全職員と、それから子どもたちが毎週月曜日に40分間の朝会がありますので、そのときに意見箱の無記名のことに関しては説明するとともに、それから、週に1回、武蔵野学院新聞というのが出ております。その新聞にその無記名のものに関しての意見と、それから対応に関しても説明しております。そういうふうなことでやっております。

最終的には、第三者委員の方にはインフォームドコンセントということで逐一報告するわけなんですけれども、そのとき、やはり第三者委員の意見がいろいろありますので、意見を伺って、それからまたお互いにまた話し合って結論まで出すということ。もし結論が出せないようなことがあったかどうかということなんですけれども、そういうようなことは今までありません。

それじゃ具体的にどういうふうなのが意見箱にあったかということをお知らせすると、大体が食事に関する意見が一番多いわけなんです。例えばどういうふうな意見があったかと言いますと、豚骨ラーメンとか坦々麺を出してくださいとか、それから、アンパンとかお茶漬が欲しいとか、こういうふうな食事の意見がありまして、その都度必ず栄養士がおりますので栄養士と相談の上に後日出せるようだったら出したりとか、そういうふうな対応の仕方。先ほど言いましたとおり、本人に申し述べるということです。

あとは、具体的にはちょっと見てみましたんですけれども、トイレが臭いというような意見があったんですね。うちの場合は全部水洗便所なもので、そういうふうなことはなかったもので担当の職員がその児童と面接したときに、あのときはむかついていたので調子に乗って書きましたというようなこともありました。

あとは、寮長に日記の字が汚いからということで差別されましたというような意見があったり、あとはいろんな意見がいろいろあるんですね。服を私物にしてほしいとか、髪の毛を伸ばしてほしいとか。今はもちろん伸ばしているんですけれども。あとは、柔道部を作ってほしいとか、剣道部を作ってほしいとか、あとはシャープペンを使いたいとか。今ずっと鉛筆を使っているんですけれども、ひところシャープペンを使ったんですけれども、シャープペンを昔言い出したことがあったんですけれども、彼なんかはシャープペンを使いまして、よく毛抜きをしましたもので、そういうふうなことを、昔は子どもたちはそり込みなんか随分あったり、あとは眉毛を抜いたり、そういうようなことがありましたもので、じゃ、シャープペンをやめようという、そういうふうな職員がありまして、今すべて鉛筆を与えております。

あとは、ちょっとやはり職員との関係性が悪くなりますと、寮長むかつくとか、場合によりましたら寮長を交代してほしいとか、そういうふうな意見もないこともありません。

大体そういうふうなことが意見です。

それで、私も今、埼玉県立の埼玉学園というところの第三者委員会をやっているんですけども、大体、意見の内容としましたら、やはり職員と子どもとの関係性が悪いと、非常にやはりいろんな意見が出てくる。これは非常にやはり自分たちの本当に一方的な、先ほど言いましたとおり、この職員はこういうふうなことがこうだ、こうだというようなことで、そういう意見が出てきたと思うので、我々の一番大きな仕事というのは、グループをいかにしっかり何でもどんどん言えるような、そういうふうなグループを絶えず作らなきゃいけないということが担当職員が一番大きな仕事なんですね。その上に立って、信頼関係というのができるかと思えます。

そういうようなことで、現在のところは武蔵野学院はもう既に10年近く経つんですけども、大きな事件、事故等はありません。あとは、私なんかは現場の人間でしたので、絶えず寮舎のほうを巡回したりしまして、何かいろいろなことがあったら直接院長のほうに来て話をしても構わないんだということを言ったので、不平不満がある場合、担当職員に直接言えない場合は一方的に寮長のほうを批判したり何か言うような生徒もおりましたけれども、そういうふうな生徒に対しては時間をかけて説明や説得するというようなことをしました。また、話して聞かせるということもしました。

○広田座長代理 どうもありがとうございました。

少年院、それから少年鑑別所の不服申立制度の現状と、それから、参考に武蔵野学院の苦情申立ての現状についてかなり細かい具体的なところまでお話しいただきまして、それでは、これを踏まえて議論に入りたいと思いますが、まず、少年院及び少年鑑別所において近年、見直されてきたわけですけども、さらに不服申立制度を一層整備していくことが必要だというふうに考えられるかどうかということで、現状についてのご質問もあるでしょうから、それと、その上で皆様方のお考えをいただきたいと思いますが、どなたからでもどうぞご自由に。

○毛利委員 具体的な不服申立ての中身というのは分類されていないんですか。どんな申立てがあったのかは。

○少年矯正課長 まず、少年院長に対する申立てについては、例をいくつかあげますと、命令口調で言わないでほしい、おまえと言わないでほしいなど職員の言葉遣いについて、教官から感情的に叱られていると感じていることがあるのでやめてほしい、先生の指導に対して聞か

い生徒もいるので、もっと厳しく指導をしてほしいなど職員の指導の仕方についてがあります。また、先ほど徳地委員からもありました食事への要望などは頻繁に出てきております。

その他、自分より後に入院した人が外部における教育活動等に参加しているけれども、自分が参加できないのは納得いかない、寮を変えてほしいなどがあります。

少年鑑別所の所長申立制度については、制度が発足して間もなくではありますが、例えば、寝る時間を遅らせてほしい、運動の時間をもっと長くしてほしい、漫画本をふやしてほしい、また、少年鑑別所ならではのことでございますけれども、前に一回少年院に行っているけれども、また少年院に行くか不安である、あるいは家族のことが心配だ、などの例がございます。

苦情の申出の内容については監査室長から説明いたします。

○矯正監査室長 矯正監査室長の久野でございます。

法務大臣あての苦情の申出に関してですが、一番多いのは職員の服務、それから、言葉遣いに関するもの、これが半数近く占めておりまして、具体的には、先生からばかにされるような言葉遣いをされた、それから、先生から乱暴な言葉遣いをされた、罵声を浴びせられた、また、先生が面接をしてくれない。そういった職員の少年に対する対応の仕方に対する不服というのが一番多いと。

続いて多いのが、少年に懲戒処分をした場合、それから懲戒処分に至るような反則行為に関する調査について自分はその反則行為をしていないとか、自分だけ調査させられたとか、そういった懲戒調査に関するものが次に多いと。

その次に、職員から暴行を受けた。それから、ちゃんとやっているのに進級させてもらえない。それから、個室にしてもらえない。そういった内容となっております。以上です。

○広田座長代理 毛利委員、何か、今の点に。

○毛利委員 例えば暴行事件なんかは、実際にそうだったのかどうかというのは調査されてあるんですか。

○矯正監査室長 暴行を受けたというような訴えの場合には、場合によっては管区から調査に行ったりして事実を確認しております。

○毛利委員 その訴えが本当だったらどうなるのでしょうか。

○矯正監査室長 今まで暴行の関係では、2件、確かに事実があった、という事案があるんですが、1件は広島少年院の事案について、その被害少年が被害を訴えてきたものでありまして、もう1件も、これも別の調査でちゃんと状況は把握していて、いずれも懲戒処分をきちんとしたものであります。

そのほかは、少年が暴行をされたということでいろいろ調べたんですけども、周りの少年や周りの教官に事実を確認した上で、事実はないということが確認されたということでございます。

○広田座長代理 全体の申立ての件数とかは分かったんですけども、その後の処理の流れとか、大体どれぐらいどういうふうな形で処理されていったのかというのは教えていただけますか。

○矯正監査室長 ちょっと7月の数字を持ってきてしまっているんですが、今まで7月14日現在で176件の申出があって、処理済みのものが確か110件処理を終えておりまして、うち、採択になったのが今の暴行関係の事案2件ということでございます。

○広田座長代理 残りはどういうふうな形で。

○矯正監査室長 残りは、まず、少年の訴えに関する事実がなかったということで不採択になっているもの、それから、その内容が希望であったり感想であったりするという場合には不決定ということになりますので、不決定となるものということでありまして、割合からいうと、80%ぐらいが不採択、その少年の訴えに係る事実がなかったと。それから、20%弱が希望や感想だということで不決定と、そういうような内容だったと思います。すみません、ちょっと手元に数字がはっきりしたものがなくて。

○広田座長代理 皆様、いかがでしょうか。

○川崎委員 今の説明をもう一度確認したいのですが、採択は2件ということですよ。先ほどのお話だと。

○矯正監査室長 そうです。採択は2件です。

○川崎委員 そうすると、職員の服務や言葉遣いについての申立てが結構あったように、先ほどの御説明で理解したのですけれども、それは不採択あるいは不決定に入っているということですか。

○矯正監査室長 そうです。少年が訴えたような乱暴な言葉遣いというのは確認できなかった、認められなかったということで不採択になっているんですが、中には、確かに少年が訴えたような暴力的な行為はなかったり、少年が訴えたような少年の人格を否定するような言葉遣いはなかったんですが、指導の中で若干言葉の行き過ぎがあったりしたということで、施設に対する指導を加えたものがこれまで6件ございます。

○広田座長代理 そうすると、不採択なり不決定になったりしたけれども、実際には実務的には改善を促したとかそういうふうなことになるんですか。

○矯正監査室長 そうでございます。

○広田座長代理 分かりました。

○毛利委員 不採択になったり不決定になったりしたことは、その少年本人にはどんなふうに伝えられているのでしょうか。

○矯正監査室長 少年に対しては施設の幹部職員のほうから、あなたの訴えについてはこういう理由によって不採択であったと、不決定であったということ、成人に比べて少年の場合は理解力の問題や、それから、教育活動をこれから先も続けていかなければいけないということなので、なるべくなぜそういうような決定になったのかということの分かりやすく説明するように、こちらのほうも、その施設に対してなぜ不採択としたのか、なぜ不決定としたのか、また、採択になった場合はこういう理由で採択になった、それから、指導事項がある場合にはこういったところが施設としても改めなければいけないというのを、わかりやすく伝えるようにしております、それを受けて施設の幹部職員が少年に対して、どういう理由であなたの訴えは不採択であったと、不決定であったということの分かりやすく説明すると、そういう流れになっております。

○毛利委員 もう一つだけ。例えばその採択になった2件の場合は、何らかの形でごめんねということはあるんですか。

○矯正監査室長 これについては、いずれも問題がありましたので、それについてはこの苦情の申出の処理以外の形で施設として謝罪をしております。

○毛利委員 ありがとうございます。

○広田座長代理 それでは、ちょっと私の方から門脇院長、小坂所長に質問してみたいんですけども、こういう苦情の申立てに関して少年の受けとめ方とか、どの程度制度について知っていて、実際にいろいろ申し出てみて納得のいかない結果だったりすることもあるかもしれないし、その少年の受けとめ方とか考え方みたいなものは現場レベルでどうなんでしょうか。

○門脇院長 一応、少年院のほうでは「生活のしおり」であるとか新入時のオリエンテーション等についてのときに告知をして、こういう制度がありますよということはもちろん説明するんですけども、理解の程度というと少年の資質の問題というんですか、それによって随分やっぱり理解に乏しいような少年もいるかもしれません。

というのは、どんなことで申し立てるかということ、先ほど徳地先生のほうからありましたけれども、例えばかつ丼が食べたいとかカラオケ入れてくれとかというのがあるんですね。ですから、そういうので理解していないなという子もいますけれども、基本的にはきちっと職員

のほうでそのたびに説明をしますので分かっているかというふうに思います。

○広田座長代理 結果が出てきたときに、その少年のほうの反応の出方とかあれば。

○門脇院長 当院の場合ですと、一身上の都合でということですが、つい2、3日前にもありましたが、彼女がいて、彼女と別れたほうがいいのかどうか、先生、どうしたらいいかって個別担任に話したら、君から別れるって言う必要はないんじゃないかと言われ、それで悩んじゃって院長申立てなんですよ。だから、そういうものについてはちゃんと首席なり、私が行くときもありますけれども、ちゃんとこういうふうにしたらいんじゃないの、こう考えたらいいんじゃないのかと指導すればそれで終わってしまう。

むしろ、その採択、不採択というようなことって、まだ私、体験がないんですけれども、おそらくそういうふうに言っても子どもたちはちゃんと分かるのではないかと思います。特別少年院とか何かそういうかなり問題の子になると、ああでもない、こうでもないというのがいるかもしれませんけれども、あまりケースとしては多くはないような感じがします。

○小板所長 静岡の実情を説明いたします。静岡少年鑑別所は3月23日からまだ1件もありません。

少年鑑別所長に対する申立てができるようになったということでありまして、その3月23日の時点で、私は、現場に戻っておりませんでして、4月1日からだったものですから準備の段階とか知らなくてできていたということでありまして、少年も戸惑うし、私自身もちょっと戸惑ったことはあったのですけれども、それまで少年鑑別所はこういう申立ての制度はなかったものですから、少年から適宜な形で日記とか面接、また、間接的にいろんな形で相談事を受けるという体制でやってきておりました。この申立て制度の説明は、入所の当日に必ずすることになっております。だれが実施したかということも記録でわかるようになっております。

この、入所の当日に実施する関係ですが、鑑別所の入所の日というのは少年にとっては初めて拘禁施設といいますか身柄として収容されるという少年もおりますので、すごく緊張しているといいますか戸惑っているといいますか、職員からの説明がなかなか頭に残りにくい少年も多いんじゃないかなということで、制度が彼らにうまく伝わっていないかもしれないという心配がちょっとありました。

それで、今日、ここに来られるということもありましたものですから、何人かの少年に実際に聞いてみました。その中には再入少年も含まれていまして、これ前なかったですよって覚えておりまして、新しくできたんでしょということで、すごく中身をずっと理解しておりまして、少年院で処遇を受けた経験もあつてか、大体そういうことですねということで、すぐにお

かるという感じでありました。

ただ、1人の少年はこういうことについて職員から説明を受けたでしょうとか聞いたんですけども、受けていないような受けたようなとちょっとあいまいな返事をしておりまして、十分理解できていない少年も一部にはいるかなというところでもあります。

ただ、少年鑑別所の実情であります。職員と少年との関係でありますけれども、実際聞いてみましても、少年からして職員が自分の行動を制限するとか自分に対して圧力を加えるとか害を加えるような、そういったちょっと警戒的などらえ方をしている少年が非常に少ない。むしろ、職員は自分の面倒を見てくれる、自分のことをいろいろ考えてくれる、心配なことでも何でも相談に乗ってくれるというような受けとめ方をしております。相談しやすいかということを開きますと、ああ別に全然抵抗なく話せますというような答えを返してくれる少年がほとんどでした。

それは、例えば少年院との比較からしますと、まず収容期間がすごく短いというのと、それから、目的からしまして矯正教育をしっかり施さなきゃいけないというのと、少年鑑別所の場合は審判まで任意の形で心身の鑑別を受けるということでもありますので、面接なんかでもしゃべりたくなければしゃべらなくてもいいというような、プレッシャーのかかりにくい形になっているということもあると思います。

それから、権利・義務等からしましても、外部交通なんか少年院と比べて広く認められているということでありまして、そういうことからしてもこういった苦情とか申立てというものが、はっきりとした形でなかなか件数としては上がってくるのが少ないのかなというふうな感触であります。

○広田座長代理 最近新しく苦情申立制度とか少年鑑別所の所長申立制度とかできたりしてきたので、とりあえずこのままやっていくという道もありますけれども、もう少し一層さらに整備していくとかという道も考えられるので、委員の方のお考えをぜひ伺いたいと思います。

○川崎委員 ちょっと質問よろしいですか。先ほど門脇院長の御説明だと、院長申立ての話のように思えるのですが、まだ、本省あての経験はないのですか。

○門脇院長 1件ありました。

○川崎委員 そういうケースで採択は問題ないと思うのですが、不採択とか不決定というのが、特に不決定あたりが少年にはなかなか分かりにくくて、そこを説明したときに聞いてくれるって言って聞いてくれない、だまされたみたいな感じを持つのではないかなというような懸念を抱きます。院長や所長に対する申立てのほうは、少年施設は規模が小さくて日ごろか

ら院長や所長が身近な関係なので、何かちょっとしゃべってみたみたいな感じで少年はいるかもしれませんし、また、院長、所長の方も少年をよく知っているのですけれども、その少年のレベルに合わせてうまくかみ砕いて説明ができると思うのですけれども、大臣あるいは監査官への申立てのほうはどうかかなと思って。

○門脇院長 1件あったのは、先ほど監査室長のほうから話がありましたけれども、調査の件でした。ある少年が3人で部屋にいたんですけれども、1人の者がいないところで新入生のほうが不正な会話を、どこから来たのかいろいろと話かけられると言って先生に申し出たんですね。そうしたら、一方の子は絶対そんなことは言っていないと。名誉毀損だと。とんでもない話なんですけれども、職員に申し出た少年、新入生というのは彼は絶対分からないようなことをちゃんと知っているんですね。例えばその人が謹慎処分を何回受けたと本人が言っていたとか、それから、だれだれ先生のときにたしかこういう時間帯にそういう話をしましたって、当直表なんか調べると全部当たっているんですね。ですから不正な内容を話したという可能性が強いんですけれども、本人がともかく言わないと言うので、結局、どうしようもないという形になって調査を続行したんですけれども、それについては非常に納得がいかないというので、大臣申立てをしました。

また、この採択、決定等についてはまだございませんけれども、実際そういうことがあった場合、この子のケースの場合は、今もうそういっても寮の中で生活をしていかななくてはいけないのももちろん不処分に、そのときに、しこりを残さないようにという指導をしました。はい、もう大丈夫ですと。そんなしこりは残さないでしっかりやりますというような受けとめ方でしたね。

ですから、この子のケースの場合ですと、いわゆる採択しませんよというような不決定とかいう結論が来たときに、それを告知しても何でというような、反応は来ないような感じがします。ただ、ケースによって、施設によって問題性の深い少年なんかですと、やっぱりそういうことが多々あるかもしれませんね。私の体験ではちょっとすみません、まだそういうのはありませんけれども。

○影山委員 質問よりちょっと確認と意見にしたいと思います。院長面接というのは、これは苦情の申出を代替する機能はあるけれども、不服申立てとか苦情の申出ではなくて面接ですから、そうすると、最終的には先ほど数字が出てきたような採択だとか不採択だとか不決定だとか、そういうふうなカウントはされないということでもよろしいんですね。院長面接の、それも何か採択とかあるんですか。1, 376件の院長面接。じゃ質問にしちゃいます。

○少年矯正課長 院長申立制度につきましては、基本的には少年院内のことをごさいます、院長の裁量で適切に処理するという次元のものでございます。ただ、それを端緒にして詳細に調査する必要があると認められれば、調査結果に基づいて上級官庁とも相談しながら適切に処理していく、そのような性格のものでございます。

○影山委員 結局、少年が不服申立てとか苦情とかを何か言いたいなというときの正面切った制度では院長面接はないんだろうなと思うんです。代替的な機能はあるんだろうと。したがって、ようやく去年の8月にできたこの大臣とか監査官に対する申出、申立てというのが一応苦情の申出のシステムのなものになっているのかなと。それから、鑑別所に関しては所長申立てというのが苦情の申出の一応システムの制度によりよくなってきたのかなというふうな感じがします。

じゃ苦情を申立てていいよというふうに言われたときに、相手が大臣だったり監査官だったりというのが子どもにとっての響きがどうなのかな、どんなふうに感じたり理解されたりするのか。例えば、ちょっと苦情を言いたいんだけど、大臣まで行っちゃうって何か大ごとになっちゃうっていうふうには子どもは感じないんだろうか。それから、監査官というのはおそらく一体どんな人や全然分かんないという感じが子どもはするんじゃないかなと思います。

何かこう、むしろ例えば院長とか、あるいは少年院の中の苦情解決責任者みたいな人に対して不服申立とか苦情の申出がちゃんとできる。それは院長面接以外のちゃんとシステムとして。あて先としていきなりどどんと少年院の外の大臣とか監査官に行く制度しかないのではなくて、もうちょっとこう、少年院って小規模なので気軽に簡便に迅速に少年の苦情に対して、でも、正式にちゃんと苦情申立てとして受け取ってあげて、面接というのではなくて、そして、それに対して回答をしっかり出してあげる。それは採択だとか不採択だとかいうふうなシステムというのを構想するのもありなのかなと思ったりします。

ただ、最後の最後まで、例えば殴った殴らないとか事実の争いが出たときに、先ほど市川委員の方からもありましたけれども、本当に事実の見極めって、私も別の福祉の施設なんかでやっていると本当に難しいんですね。施設の中でいわゆる体罰があったのなかったのという訴えがあったときに、これは職員の方は大概否定されますので、子どもの訴えは結構リアルだったりするときに、本当にあったのかなかったのの見極めって難しいんですね。それを、例えば少年院の内部とかあるいは法務省の内部だけでずっと最後まで解決してしまうというのがどうなのかという感じはします。

ただ、じゃ食事ももうちょっとおいしくしろとかというようなことまで含めて、全部第三者

の審査委員会みたいなところ、さっきの視察委員会とちょっと違う、苦情処理のための第三者委員会みたいなものが全部出てくるというのは、あまりにも重た過ぎる感じは私はするんですが、しかし、やっぱりいくつかのケースに関してかなり限られたケースに関しては、そういった第三者委員会的なものが動くというふうなシステムがあってもいいのかなという感じもします。だとしたら、その第三者委員会的なものは各施設に1つである必要はないようなものを考えてもいいのかなと。

いずれにしても、こう苦情とかという問題が出たときに全部少年院の中だけで処理をしてしまったり、あるいはすべて法務省の中だけで処理をしてしまうというのは、そこで完結してしまうのはやはり少し疑問があるかなと私は思います。

○広田座長代理 どうでしょうか。

○市川委員 影山委員のお話について言えば、例えば大臣のところまで行ったらどうなるかということが、分かるようにするのがいいという気がします。

精神科の病院の場合はドクターが外から来て、本人に話を聞いてくれて、結果として、「あなたは退院できません」と言われると、「聞いてもらったのにだめだからしょうがない」と本人は納得するところがあります。全く違う人に話を聞いてもらって、「どういうふうになってそういう結果が出たか」ということが分かるようにしておけば、少年院の方でも理解してもらえるとこの感じがします。

先ほど徳地委員から御説明があった武蔵野学院のことでちょっと質問させていただきます。第三者委員が弁護士さんと現場経験者と学識経験者となっていますが、武蔵野学院の入院者という立場の方はここに入ってこないんですか。反対側の立場の人も入っているべきではないかなという気がしたんですけれども。

○徳地委員 この中で武蔵野学院のことをよく御承知でない方は弁護士さんと、それから学校の校長先生上がりの方がよく学院の職員との関係性がとれていない方なんです。あと、現場経験者と学識経験者は、これは児童自立支援施設のことをよく熟知している方で、ちょうど2対2でバランスからいったらいいかなという感じはあったんですが。

○市川委員 福祉施設の場合は、利用者側の人、つまり、当事者に1人入ってもらっています。利用者というのかな、逆の立場の方も入ってもらったほうがより透明性が高いと思って伺ったんですけれども。そういう方が果たして選べるかどうかという問題はもちろんよく分かりますけれども。

○徳地委員 そうですね。今、武蔵野学院も児童のいわゆる自治会を作ろうという動きがある

んですね。そうした場合、自治会の会長さんでもメンバーの中に入れることができないこともないかと思うんですね。

○市川委員 ただ、そういう方は一定期間しかいらっしゃらないから、もと学院の中にいた方とか入っていただくといいと思って質問してみました。

○徳地委員 わかりました。

○広田座長代理 1点、ちょっと違うところから質問したいんですけども、施設の外に申立てるような形にしたときの処理のスピードについてちょっと教えてほしいんですけども。所内でやると結構迅速に対応できると思うんですけども、外へ出して、今、影山委員が言われたような第三者委員会とかのメリットは、そういう公平な部分はあるんですけども、逆に、処理スピードが全然遅くて対応できないということもちょっと気になるので、大臣への苦情の申出とか、大体どれぐらいのスピードで案件は処理できているんですか。

○矯正監査室長 先ほど処理結果についてちょっと数字が不正確だったんで訂正いたしますが、7月14日までに88件処理が終わっております。うち採択が2件、それから不採択が58件、それから、希望や感想や取り下げ、出院などによる不決定、これが28件というふうになっております。

処理の日数なんですけれども、平均処理日数が110日で、最長が305日、それで最短が21日というふうになっております。

○広田座長代理 やっぱり時間かかるもんですね。

○矯正監査室長 そうですね。やはり事実関係の確認になかなか時間もかかりますし、また、その前提として、まずどういった訴えであるのか、そこをよく、なかなか表現力が十分でないケースもあって、訴えの内容を確定した上で事実関係を調査する。その場合にも、施設から資料を取り寄せたりはするんですが、事案によっては管区や矯正局から行って事実を確認しなければならない場合もありまして、どうしても暴行をされたというような訴えについては、やはり事実関係をきちんと確定するにはいろんな証拠を当たったり、職員が事情を聞いたりすることになるため、処理に結構時間がかかるというふうになっております。

○広田座長代理 ちょっと私の個人的な意見ですけども、外で客観的に把握して処理しないといけない問題というのはあって、それはそれで重要だと思うけれども、本当に何か少年の気分的なもやもや感を反映したような問題とかというのは、その場でできるだけ時間をかけずに処理して、職員の対応とかにフィードバックできるような仕組みもまた重要なことというふうに思うので、そこは制度を作るときのバランスだと思いますね。

だんだん時間がなくなってきましたけれども、不服申立制度のほかには何か被収容少年の権利救済等のための有効な方策みたいなものがあれば、ぜひ御意見をいただきたいということですが、

○石附委員 字が書けないとか知的に理解力がない少年というのがいると思うんですけれども、そういう場合に知的理解力がない少年について、例えば付添人とか、それから親権者とかにそういうことと話すという機会はあるのでしょうか。もやもやというのが、大分重大なもやもやがあるかもしれないんですけれども、それを聞き分けるのがとても難しいとか、文章化するのが難しいとか多様だと思えます。私がなぜこんなことを言いますかいうと、少年院というのは非常に処遇期間が短いわけですね、刑事施設と違って。その中でそういうことに対応しようと思ったらどうしたらいいのか。逆に言えば、その辺はどういう観点で処理していったらいいのかということをちょっとお尋ねしたい。

○少年矯正課長 恐縮ですが、もう一度よろしいですか。

○石附委員 少年が字が書けないときは職員に書いてもらってもいいというのがございましたね。だけど知的理解ができなくて字に書くのももう一つ、字で表現するほどの表現力もないけれども、だけど、権利の問題として人権感覚から見れば問題だなということが今後起こってくる可能性というのがあると思うんですよね。そういうときにどんな対応をするのが、先ほど影山委員のお話にもありましたけれども、付添人との交流とかそういうことは可能性があるのでしょうか。あるいは中の職員で対応されるのがとても難しくなるような気がしますが、

○少年矯正課長 少年個々の事情にもよりますが、知的な制約がある少年等につきましては、施設内で可能な限り信頼関係を結んでいる職員が寄り添って最大限の努力をし、意を酌み取ることが基本であると考えます。その上で知的・身体的に制約がある少年、あるいは外国語を介する必要がある少年などの場合はもう外部の専門家の協力をできるだけ得て対処することにも努めております。

院長さん、どうですか。

○門脇院長 今、課長からお話ありましたけれども、そのとおりですね。ただ、知的に障がいがあって、ちょっと私、特殊教育課程の施設に行ったことがないので分からないんですけれども、基本的にはその職員が何とかしてあげる、いろいろ話を聞いてあげるといえるのはあると思います。私の経験したことでは、さっきちょっと例を出した手紙の件の子ですけれども、その子は元付添人という方が、とても熱心な方で、少年が出院してからも面倒を見てあげたいというようなことで、通信許可をとっていました。ですから、本当にいろいろ積極的に指導してい

ただいでよかったですけれども。

ですから、元付添人の方で、ある意味、積極的に必要があれば外部交通の通信相手として許可をしていますので、そういう道も当然開いています。

○広田座長代理 他に、何かご提案は。

○徳地委員 ちょっと門脇院長に御質問あるんですが、書面にて申立てする場合、その書面を書く場所と、それから、申立てをした場合、他の少年から圧力といいましょか、もしくは違った見方をされるとか、場合によったら申立てが寮舎単位として流行するようおそれはないかどうかですね、それをちょっとお伺いしたいんですが。

○門脇院長 基本的に書面で申し出るときは、必要があれば個別の部屋に移して書かせるというような配慮もしております。それを見て他生がどうのこうのということというのは、今までないですね、そういうことというのは。

○徳地委員 それが流行するという状況はありますか。

○門脇院長 逆にですか。その申立てをどんどんやるみたいですか。そういうことも……。これは先ほど徳地委員がおっしゃったみたいに、その職員と生徒の関係性が悪いとやっぱりあるんですね。要するに、少年院でいえば教育的風土というのが崩れてくるようなことであると、何でも言っちゃえみたいな、そういうようなことでどんどん申立てをするというようなことになり件数は多くなるんじゃないでしょうか。

○徳地委員 私、さっき意見箱のことを話したんですけども、武蔵野学院の場合は意見箱だけではなく、あとは厚生労働省の児童福祉専門官が来まして、専門官立ち会いのもとに学院生活のアンケートというものを年に2回やるんですね。その内容も非常にやはり、例えば内容は、学院はあなたのことを考えてくれる場所ですかとか、あと、あなたが生活する寮舎はあなたのことを真剣に考えてくれますかとか、その他に、あなたは先生から体罰を受けたことがあるのか、それから、あなたは他の生徒がほかの生徒から体罰を受けたりセクシャルハラスメントを受けたりそういうふうなことがないかとか、そういうふうなことのアンケートがあるんですね。

これ年2回やりまして、それを集計しまして先ほど言いました第三者委員に報告したり、あとは直接やっぱり職員に話をしたり。これは職員は全然考えないで厚生労働省のほうからこういうふうなアンケートをするもので、ちょっとやはりこういうふうなことも今後必要じゃないかと思ってはいるんですけども。非常にこの点に関しては、これ無記名ですから、生徒はやはり先ほど言いましたとおり関係性がしっかりできていないと誤った回答をするような生徒も

いるんですけれども、これをひとつ参考資料としまして、職員のいろんなスキルの向上とか、また権利擁護のことを考え直さないといけないと思うんですけれども。

○広田座長代理 有益な御提案もいただいて、不服申立制度を含めてようやくいろいろ子どもの声をきちんと拾う形のもの動いていると思うのですが、今の不服申立制度は訓令とか通達で運用してきておまして、それをちゃんと法律に書き込んで根拠を与えてさらに整備していくということが考えられると思いますけれども、それについては皆さん、御意見どうでしょうか。影山委員、どうですか。

○影山委員 先ほども申し上げましたけれども、代替的機能を持っている院長面接は正式には苦情申立てではないんですね。ただ、これはこれで僕はすごく、むしろこちらのほうが子どもたちは割と使いやすくて、院長先生とも親しくお話ができるとか、その中でやっぱり、広島少年院のことってほかの矯正教育の方なんか話を聞くと、院長さんがわかんないはずがないとか、普通だったら。少年の顔を見ていればわかるっていう、それがむしろ常識。何であるものがわかんなかったんだっていうふうなことをおっしゃる方も結構多くて、やっぱり院長先生がしっかり子どもたちの表情、顔をしっかり見ていて、そして、子どもたちが院長先生にちゃんと面接の申し出ができるような雰囲気というのがあることというのは、一方においてすごく大事で、それがしっかり機能していれば苦情申立てというのはあつてないようなものでもいいと思うんです。

でも、あつてないようなものでいいけれども、ある必要があつて、それは大臣訓令なんかでとりあえず臨時につくったものではなくて、ちゃんと法律でしっかり根拠づけをしていく必要があるのかなというふうに思います。

それから、苦情申立てする子どもたちのやっぱりリピーターってきつとたくさんいて、この130件とか90名とかいうけれども、うち1人で何件もやっている子というのはきつといるんだと思うんだけど、それはそれでその子のきつと何か言いたいことがあるんだろうから、それなりに受けとめてでも通らないものは通らないので、通らないときにどうして通らないのかという説明とか納得感とか、本人も、もやもやしなながら何か訴えたいと思ってそういうのを利用しているのかもしれないので、そのフィードバックの仕方というのは丁寧に工夫していただければ、子どもたちの言うことが何でもかんでも通す必要は全然ないわけで、ちゃんと丁寧にどうしてそれは聞けないのかとかいうことを、丁寧にフィードバックを各少年院でしていただければいいのかなと思います。

最後は関係ないんですけれども、法律でちゃんとやるのは必要だと思います。

○広田座長代理 いろいろ御意見いただきましたけれども、複合した制度を整備していく、特に法令上整備して、やっぱり十分な手厚い形で動かしていくというのは必要だというふうなことが、一つのまとめとして言えると思います。

それから、特に、少年への説明とか理解してもらうことというフィードバックの部分が、やっぱり実務的にはきちんと動いていくようなことが制度的には重要かと思います。

それから、出された意見の中では、やはり施設の外に話が行くという、第三者機関という話もありましたし、全く違う人に話を聞いてもらうということも重要だということもありましたし、もう一方では、少年の身近なところで迅速に動くという、それとの両方をどういうふうに進めていくかという辺が制度的には重要なんだということが意見全体としては言えるのではないかと思います。

まとめましたが、それでは、本日の最後の論点で、3つ目の論点ですが、職員と在院（所）者の関係の在り方について検討したいと思います。

第三者機関、あるいは不服申立制度の運用を前提とした場合に、今後の少年院及び少年鑑別所における職員と在院（所）者の関係について、考えるべき事項は何かといったことについて考えていただきたいと思います。

また、施設の透明性の確保とか被収容少年の権利救済、処遇の向上といったことで、そのほか検討しておくべきことがあれば御意見もいただきたいと思いますけれども、特に、職員と少年のほうの関係の在り方をどうでしょうかね。

○廣瀬委員 前から出ている話ですけども、人権を保障することが決してその矯正教育と矛盾するわけじゃないというお話は、僕は結論的にはまさにそうだと思うのです。けれども、それには言われている人権の中身がどういうもので、具体的にどうすればそれを保障することになるのかというコンセンサスがきちんとできていないと、非常に誤解される、障害になるという感覚になるのもまた僕は分かるのです。世間一般のいわゆる「人権」といわれるようなこととかは、施設の職員も当然耳に入るわけです。ですから、その辺のところは、そういうバランスをきっちりとっていくということが非常に大事です。今日いろいろ、福祉施設、医療施設とかいろんなところからのお話もありましたけれども、毎度の話で申し訳ないんですけども、少年院の強制的に収容し、しかも、本人が望んでいないようなこともやっていかなきゃいけないというようなシステムの中であるという特質は考えていかなきゃいけない。そういう中で議論が出てこないといけないと思うのです。ですから、それぞれ、今日のお話、それぞれ、僕はごもつともだと思っていますけれども、全体のバランスをどうとっていくかということになる

と非常に難しい。法整備ということになると、例えばこの不服申立の関係で秘密性を確保する、不利益取扱いしないとか、いろんなことがあります。例えばまさにクレーマー的にそういう通らないような主張をしたり文句を言ったりする、そのこと自体が本人の問題性の表れだったりするような場合、それを取り上げないと教育にならないわけでしょうが、不服申立や申出の不利益取扱いの禁止との関係で、教育的に取り上げることもできないということでもいいのか。例えば、かなり難しい問題で直接ではなく間接でやるということになるのかもしれないけれども。禁止条項が入ると、現場としてはかなり引くということになるでしょう。だから、そういうことも含めて技術的には非常に難しいところもあると思います。教育的な観点などからも前提、刑事施設などとの違いを整理していかないといけないのではないかな。

しかし、具体的にどうすればいいのかと言われると、私もなかなかいい知恵が出ないのかもしれませんが。半分は感想です。

○広田座長代理 総論として、非常に重要な点だと思いますけれども、皆さんいかがでしょうかね。

○市川委員 廣瀬委員がおっしゃったのはもっともだと思いますが、逆に言えば、認められないということが何回か繰り返されている間に、「なぜ認められないか」ということを中で話し合っていけばいいわけです。外の人が入ってきて、そのことを取り上げて、「なぜあなたが一生懸命言っているのに通らないのか」に話を持ち込んでいけばいいわけです。医療が違うだろと言われればそのとおりなんですけれども、精神科の医療施設で自分から望んで入っている人はほとんどいませんから似た状況です。そういう点は僕らとしてはそれを逆に利用してうまくつき合っていくというのが一番具体的な道と考えています。

○毛利委員 実は、僕は半月ぐらい前に、さっき不服申立であったような乱暴な言葉遣いとかありましたね。それを自分がしてしまったという経験がありまして、10人ぐらいの子にウクレレを教えているんですけども、もう何か月も知らんぷりをしている子が2人いるんですね。ウクレレを弾いてもみないかと言っても、やらない、ここ半年ぐらい格闘しているんですけども、集団に弱い子と強い子がいて、その子たちは非常に強い子なんです。弱い子が、指導しているときに歌を歌うとってこの子に歌を教えようとしたら、その2人がその子をばかにして邪魔をするという経緯があって、そこで君たちがやりたくないとかやらないのはいいけれども、人の邪魔までするなよとってかなり激しく僕は怒ったわけです。

そのことでもめて、結局その叱られた子たちはその授業に出ないということになったんです。どうして怒ったかという、非常に弱い子が勇気をふりしぼって、歌を歌おうと決意して人前

に出てきた。それを二人がからかった。何回も注意をした末におさまらないので怒ったんですが、そのときの、結局こちら側にある基準、正義感と言ってもいいです。君たちはこの基準を明らかに踏み越えているぞ、と感じた。怒った後に僕も非常に落ち込んだんですけども、そうすると、あそこでぐっと我慢することが正しいことで教育だったのかなと思うと、何かどうも違うような気がするんですね。こちら側に基準があって、それをぶつけ合っているわけで、不服申立てされても仕方がないんだけど、そうすると、それを法務教官が不服申立てされるからという理由で回避したらどうなるのかというのが、僕の疑問です。法務教官が何をしたいのか、悪いのかというのをうまく言葉にしていないと、やらないほうがいいのかという話にならないんだろうかと。ぜひ市川委員に教えてほしいんです。

○市川委員 第三者機関というのは一方的に少年院を責めるものではなくて、毛利委員のなぜそういうことをしたかという両方の意見を聞くはずですよ。そこで、毛利委員のことがうまく相手に伝わっていないとか、そういうような結論が出てくるはずなんで、そのことで毛利委員が心配する必要は全くないと思います。

○毛利委員 いえいえ、僕は当事者として、実はそういうものに乗るか乗らないかということ以上に傷ついているわけですよ。怒ったことに対してね。そういう現場があるので、そうすると、それをだれが応援してくれているのかという問題が、これから作る法律の問題とかその中かなりデリケートにあるという、それと、第三者委員会で公平に見ているということはもちろん大切で、それはいいと思うんですけども、そうすると、広島少年院の事件がそうかというところと違いますが、どこかで法務教官が体当たりをして少年と格闘する場面をどこまで保証するのかという言葉がそこにはないと委縮してしまうので、それをどうするかというのをぜひ話し合えるといいなと思ったんです。

○川崎委員 毛利委員は怒るというようなことは極力しないという主義でおられたから、すごく落ち込んでおられるのだと思うんですけども、怒ることをいけないということにはならないと思います。怒り方が問題で、そこで体罰が出てしまったり、あるいはひどく相手を傷つけるような侮辱的な差別的な発言が出てきたりすると、それを訴えられると問題にはなるとは思います。怒られたことを本人が不満に思ったとしても怒るべき事態であったということが証明されれば、怒ったこと自体がいけないということにはならないと思うんです。

ただ、本当かうそか知りませんが、よく学校の生徒が、先生が怒りかけると「やれるもんならやってみろと、教育委員会に言ってやるから、僕が殴ったって罪にはならないけれども、先生が殴れば罪になるんだ」というようなことを言うという話がありますよね。先ほど、

門脇院長が講演に行かれたときに、すごく態度が悪くて、だけど、先生方は注意もしなかったと言われたようなことを聞くと、毛利委員が心配されているような、やっぱりトラブルは避けたいからということで、腰が引けちゃうとか目をつぶって見なかったことにしてしまうとか、そういうのは矯正施設の中でもあり得ると思います。巡回していて気になるけれども、注意するとそこでごちゃごちゃしてうるさくなるから、まあいいや、黙っておこうっていうような先生がいたり、それを片方では見逃さずに怒る先生がいたり、そこで少年がこっちの先生は話わかる、こっちの先生はうるさいと評価したり、あるいは、誰にも厳しくする先生が公平だと信頼して、見逃す先生を弱腰で頼りにならないと不信感を持つこともあります。そういう今でもあり得ることが、こういう制度ができることによって、より起こりやすくなる可能性はあると思います。

○毛利委員 僕はそれを前提に言っているのだから第三者委員会も賛成していますし、その不服申立ての制度もきちんと運用されるのがいいと思っていますが、そのときに、教育をしている人が何をできるのかということが議論されていないと委縮するだけの効果になると。そこがやっぱりきちんと論議を尽くされないといけないなということを申し上げたんです。

○広田座長代理 職員の方でできることはどこまではできると。今のとちょっとかかわって、門脇さんとか小坂さんに聞きたいのは、申立てとか申し出をされた職員が当事者になって、おまえというふうな、そういう職員が大体どういう反応をするのか、それから、その職員の周りのメンバーがそれをどういうふうに支えたり励ましたりみたいなの、そこら辺は今実際どうなんですか。

○門脇院長 先ほど例に出した話がまさしくそうなんですけれども、指導するとすぐクレーマーみたいなの、虐待されているからという話をしましたね。手紙を出すと。読んでみて、どういうことと話を聞いてみると、いや、そのぐらい言わないと親が来ないんだと。それは違うんじゃないのという話をすると、院長に私は丸めこまれたと言うと。そこがまさしく君の問題だよということで、その子は入ってきて自殺のまねをしたりなんかしたんですね、最初に。そこが君の一番の問題だよということを言って、個別処遇として課題を与えてそこについて考えさせるかどうかと。これは院長として考えさせるべきであるという決断をして、させたんですね。そうすると、また、申立てをするわけですね。虐待を受けていると、自分は。

というようなことをずっとやっていたんですけれども、そういう場合はやっぱり、先ほど広田委員がおっしゃったようにじっくり説明して、こういうところが君の問題なんだよと、考えなきゃいけないんじゃないかということを説明するしかないと思います。こうなると、もう施

設全体としてかかわるというような形になりますよね。

結論は、その寮の主任が転勤になりました。そして、個別担任がその子を個室に入れて課題を与えて考えさせたんですけれども、いったん寮に戻してほかの周りの仲間たちがどんな気持ちでいるかということを見させたほうがいいということで、降ろしたいということで、降寮させました。そうしたら、その転勤するという寮主任が少年に囲まれて泣いていたわけですね。先生、行かないでと。その姿を見て、彼も泣いたんですね。それから、変わった。

だから、やっぱりそういう非常にクレマーである問題を抱えている子については、大変です。だから、私も慎重に関わるように言いました。あまり個人的に無計画に行きますと、それはまた問題が出てきてしまいますので、とにかく全体の問題として取り上げる。全体でもってその対応方法について考えていく。計画性を持つ。待つこともしっかりですがそういうような対応をしていきました。

○広田座長代理 うまくいくケースはそうだと思うんですが、うまくいかない、気がつくとか何か職員のほうが委縮しちゃっているとか、そういうふうなケースもきっとあるんだと思うんですけれども、そんなことはないですかね。

○門脇院長 そのケースのときは委縮していました。職員も、もう言ってられないと。だから、もうあまりかかわらないようにしようという話になりますと、少年が今度は、最近、先生は自分の見る目が違うと、こうなるんですね。非常に冷たいと。いつも声かけてくれていたのが声をかけていないとかですね。それがまた申立てになるんですね。だから、もう大変でした。

○市川委員 まず、先ほどの毛利委員の発言とも関係あるかもしれませんが、少年院だけでなく医療機関のスタッフでも、学校の先生でも、本人だけでなく親御さんからも攻撃されてうつ状態になる人は珍しくありません。その一人のスタッフだけではなくて、他のスタッフと横の連携をつくって、うまくいかないときは話合っていくしかないと思います。

職員が一人で頑張って一人で疲れていくというのは、システム上無理があるということだと思います。先ほどの毛利委員の話に戻れば、毛利委員としては「一生懸命やったんだけどうまくいかない」ということをほかのスタッフに話して、どういう意見を言っただけのことは重要だと思います。

まず、先ほどの毛利委員のとも関係あるのかもしれませんが、結局、これ少年院だけでなく今はもう医療機関のスタッフでも、それからあと学校の先生でも、本人そのものだけでなく親御さんから一緒になって攻撃されてうつ状態になっちゃう人はいっぱいいるんですね。今何をするかって言ったら、やっぱりその一人のスタッフじゃなくて、他のスタッフと横

の連携をつかって、いまくいれないときは話合っでやりなさいというのが、もうこれしかないんですね。

それで、一人の職員が一人で頑張っで一人で疲れていくというのは、もうこれは無理だということなんで、おそらく、少年院の場合、保護者が出てきて攻撃するというのはあるのかどうかよく知りませんが、そういう考えでいけば、先ほどの毛利委員の言いでいえば、毛利委員としてはこういうことをやっで、おれは一生懸命やっただけでもうまくいれないということをほかのスタッフに話して見て、どういうふうな意見を言っでいただけるかということ重要だと思っでますけれども。

○毛利委員 実は、そういう話し合っを、その後持ったんです。それである程度は解決したんですけれども、怒ったことそのものは消えないので、なかなかこれが大変なんですね。

それと、僕が言った事例というのは中津少年学院というところなので、一人一人本当に結構すごいですよね。とりわけ、10人ぐらいになると一番やらない子が主役になって、その授業全体が妨害に對応しているのにかかりきりになる。それを周りの子が見ているというような状況にたびたびなるんです。1時間半の半分ぐらいがそうなるようなときもあっで、その中の出来事なので。全体がそうだとは言っでおりません。

○広田座長代理 津富委員、何かさっきちょっと違っ話をしてというのは。

○津富委員 違っというか2つ考えて、一つは質問だったんですけれども、ちょっとそれは前の話につながっちゃうかもしれないが、普通の社会で生活をしてると、人権救済を求めんためには、弁護士会に行ったりとか、あと、人権擁護局に行ったりという手段があると思っんですね。

しかし、僕が、少年院で勤めていたときを思っで、そういう手段があるよと教えていた記憶はありません。しかし、こうしことは、実際、社会に出てからも役立つ知識ですよ。使ったときに実際に役立つかどうかは別にして、社会に普通にある手段は、実際に、少年院で起った問題についてそうし手段を使うかどうかは別にして、法知識としてというか、自分の人権を守るためには必要ですから教えたらどうかと思っんです。私も以前、大学でセクハラと思われることがあったときに、女子学生と一緒にそうし機関を活用をしたんですけれども、やっぱり、そういう社会に用意されている手段を普通に教えるということも、実際に活用されるかどうかは別にして、必要だと思っでます。そこで、これからは、そういう方向性はありますかというのが1つ目の質問です。

2つ目も、続っで言っでいいでしょうか。2つ目は意見ですけれども、広島少年院の話を考

えていると、いろんな制度を作ったとしても、あのときも制度が全くなかったわけでは当然ないので、制度が使えなかったというのが最大の問題だろうと思うんですね。

ですから、今回いろんな制度を作っていくっていても、結局使うかどうかというのが非常に重要で、そうやって考えると、僕、こういう言い方をするとちょっとネガティブすぎるように聞こえるかもしれませんが、やっぱり上下関係とか権力差があって言えない状況というのは、どうやって突破するかが難しいんだと思います。しかし、今回、議論されているような案というのは、権力で権力を抑えるというようなものですから、こうした構造だと、なかなか難しいと思うんです。

ただ、じゃどういう制度にすればいいかといって、今回の案がまったく無駄だということはないんですけれども、とは言え、どうやったらフラットなコミュニケーションを少年院の中で取り戻すかということがやっぱり一番の課題なんだろうと思うんです。

妄想的な発想ですけれども、でも少年院の教官だったらきつとこういうことを考えるんじゃないかなという一つの例を話します。たまたま、この前映画を見に行きました。フランスの映画だったんですが、「パリ20区、僕たちのクラス」というのを見られた方はおられますか。中学校を舞台に、中学生と教員がずっとやり合っていくというすごい映画なんです。映画の中で、今日の毛利委員のお話じゃないですけれども、教員が子どもに対して暴言を吐いてしまうというのが山場です。暴言を吐かれた子どもは反抗してそのあと暴力をふるいます。暴力をふるってしまった子どもの懲戒のための会議をやっているときに、実は、教員が暴言を吐いたから暴力を振るったということが明るみに出ます。この映画がなぜすごいかと言うと、本物の中学生と1年間ずっとワークショップをしながら作ったということです。

この話を少年院に戻します。少年院では、子どもが何か問題を起こしたときには、これはチャンスだからと一生懸命介入を考えます。僕は、いつも思うんですけれども、少年院全体で何か問題が起きたときも、同じようにチャンスだと思うんです。やっぱり広島少年院のような、できごとが起きたときには、これを、どういうふうに施設全体で教育的に使えるかみたいな議論をすべきだし、それをしたら、たとえば、このできごとについて少年院生と職員で徹底的に議論して何か劇のようなものにしていくといった取組みがあつてよいと思うんです。何で先生って暴力振るっちゃうんだろうとか、そうすると振るった先生ってどうなるんだろうとか、あるいは何で僕たちというのはなんでそのときに言えなかったんだろうとか、そういうことを、院生と職員で本音で話をして劇を作っていけるような力量は、僕は法務教官にあると信じています。人権が侵害される問題が起きる回数が減るかどうかが一番の課題だと思うん

ですが、劇のような取組みを通じて施設風土自体を変えていかないと、むしろ、制度ができたことによって、事後的に露見する確率はおそらく上がると思うんです、

つまり、一番肝心な、そもそも人権が侵害されるという状況自体を減らすにはどうしたらよいか、あるいは、昔からある、あるいは、新たな制度がちゃんと使われていくにはどうしたらよいかということを見ると、本省の方で考えられることというのは、今日論じられたように、制度的なものかもしれないですが、私としては、むしろ、現場がこういう人権が侵害されたという事態をどのように教育的に使っていくかという取組みを、たまたま劇という形で言ったんですけれども、作っていかなければいけないと強く思います。

多分、実際、法務教官はそういうクリエイティブなことはいっぱい実は考えているんじゃないかなと思います。

○広田座長代理 1つ目の方は御質問ですか。

○津富委員 質問ですね。そういう方向性がありますかという。

○広田座長代理 人権を守るような知識をその少年院の中で。

○津富委員 そうですね。弁護士会の人権救済とか、あるいは人権擁護局もありますよね、法務局でやっているものです。そういうのを普通に教えて、社会にはいろいろな手段があるよと言ってあげるというような。

○門脇院長 それは、津富委員と私、一緒に勤務したことがありますけれども、委員が多摩におられたときはなかったですね、そういうのはね、確かにね。

今はもう違ってきて、昭和59年当時ですか、そういうようなことはありませんでしたけれども、今はもうそういう方向性にあると思います。特に、近年では、何回もクレーマーみたいにして申出した子どもも、それはどうぞと、淡々と対応しています。先程のケースで言えば、問題性であるけれども、この子は日弁連にも手紙を書きましたが、いいですよと淡々と受けてやるという職員の姿勢もできてきたというふうに思います。

○津富委員 僕が思っているのは、社会にはこれだけ救済手段があるんだよということを知ってもらおうこと自体が、確かに、目いっぱい活用されると施設にとって迷惑な部分もあるかもしれませんが、やはり、子どもたちに知ってもらうことで、日本の社会に対する信頼そのものがつくれるのかなと思うんですね。

○広田座長代理 どうもありがとうございます。

時間が来てしまいましたけれども、やっぱり廣瀬委員がこの3つ目の話題の最初に言われた人権と、それから実務的な施設の目的とのバランスをどうとるかというのは非常に重要なポイ

ントで、そのときに職員がやれることをどこまでちゃんとやれるようにやるかという部分がな
いと、何か委縮が進むようなことであるとマイナスになる。それから、他のスタッフとの連携
も必要だし、あるいは最後、津富委員が言われたように施設の中で起きるようなマイナスもプ
ラスに使えるようなことを考えていけば、いろいろ可能性もあるのかもしれないというふうな
ことが話に出たと思います。

ということで、時間が来てしまいましたので、今日はこれで閉会としたいと思います。

○市川委員 最後の職員と在院者の関係というテーマのところ、似たようなことは私の関係
するエリアでも起きることはあります。2つあり、前からちょっとわさがある人が気になる人
が起こす場合と、熱心なだけけれども、何か熱心さの裏返しで起こす場合があります。

スタッフは大人であって、それで少年院にいる人は子どもであるという前提がどこかにある
んですよね。大人が正しくて子どもが間違っているという考え方が大もとにあると、もともと
大人に反発している人がいっぱい入ってくるのでうまくいきません。病院の中で1週間に1時
間だけスタッフもその中にいる人もみんな平等の時間を作ろうと、1時間だけみんなで勝手な
ことを言って過ごす時間を作ってみたんです。そうすると、スタッフの方で変に力の入ってい
る人が減ってきたり、スタッフ同士で「私はこういうやり方をやっていたけれどもあの人はこ
ういうふうにするんだ」ということが見えて、お互いによい影響がありました。

矯正する側と社会で問題を起こしてきた側という相反するものではなく、空間を共有する時
間を作るといいと思います。

○広田座長代理 今のお話は前に津富委員が問題提起されて、やっぱりフラットな関係へと作
りかえていく部分という、それは当面何がどこまでできるかわかりませんが、長期的に
は重要な課題だというふうに思います。

次回の第9回会議は、8月3日に矯正研修所の視察を行って、併せて職員の人権意識の向上、
職員育成の在り方というテーマで議論を行う予定としますので、よろしく申し上げます。

午後5時00分 閉会